

1. はじめに



浄土ヶ浜（宮古市）

三陸復興国立公園指定10周年を迎えてのメッセージ

三陸復興国立公園協会

会長（宮古市長）

山本 正徳



この度、三陸復興国立公園が指定を受け10周年を迎えられたことを心よりお祝いする。

三陸復興国立公園は青森県南部から宮城県の大鹿半島に至る三陸海岸一帯を占める国立公園である。東日本の国立公園では唯一ともいえる本格的な海岸公園で、面積は28,539 haとなっている。

1955（昭和30）年5月2日に陸中海岸国立公園として指定され、2011（平

成23）年に発生した東日本大震災による津波で指定区域が大きな被害を受けたことを受け、震災からの復興および被害の伝承を目的として、2013（平成25）年5月24日に、青森県の種差海岸階上岳県立自然公園を編入の上、現在の名称に改められ、この度10周年を迎え、当協会も三陸復興国立公園とともに歩んできた。

南北の延長は約250km、北部は「海のアルプス」とも称される豪大な大断

崖、南部は入り組んだ地形が優美なリアス海岸が続く。海岸にはウミネコやオオミズナギドリなどの海鳥の繁殖地がある。

八戸・宮古・金石・大船渡・気仙沼・石巻など日本有数の水揚げを誇る漁港を有しており、新鮮な海の幸を味わうことができることも大きな魅力である。また、災害からの復興を目的のひとつとした、国内では前例のない国立公園であり、防災教育の学習を目的とした人々も全国から訪れている。

2019（令和元）年6月9日に全線が開通した「みちのく潮風トレイル」は、雄大な太平洋にそって旅をする、復興と自然の恵みを感じることができる道である。2024（令和6）年はみちのく潮風トレイルが全線開通し5周年となる。

みちのく潮風トレイルが、国内外の観

光客に認知され、観光客が増加する中、こうした機会を好機と捉え、各地域との連携を図り、三陸沿岸市町村が一体となって、観光客誘致の促進や交流人口の拡大に向けて取り組んでいく。

末筆ながら、三陸復興国立公園の一層のご発展と関係各位のご活躍を祈念致して、お祝いの言葉とさせていただきます。

北山崎
（田野畑村）

目 次

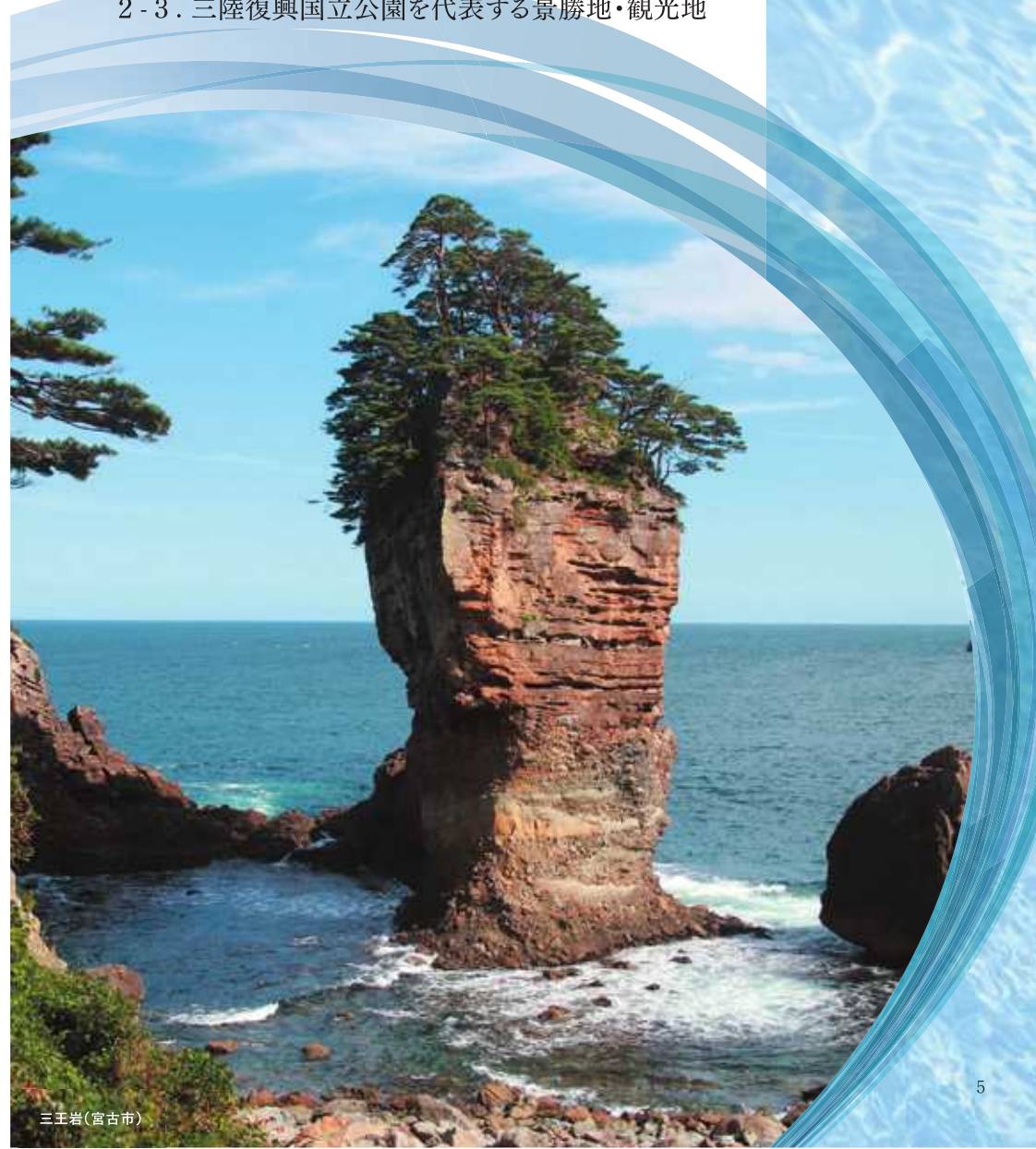
1. はじめに	2
2. 三陸復興国立公園について	
2-1. 三陸復興国立公園の概要	6
2-2. 三陸復興国立公園誕生の経緯と10年のあゆみ	10
コラム①三陸復興国立公園で活躍するパークボランティア	18
2-3. 三陸復興国立公園を代表する景勝地・観光地	24
3. 未来にむけて	
3-1. 公園関係者からのメッセージ	30
コラム②東北太平洋沿岸津波浸水域における自然環境調査	44
コラム③国立公園満喫プロジェクトの始動	48
3-2. 関係市町村長メッセージ	50
コラム④東北太平洋沿岸を長く歩く旅の道 ～みちのく潮風トレイルのこれまでとこれから	56
3-3. 子どもたちからのメッセージ	59
コラム⑤三陸ジオパークと三陸復興国立公園	62
コラム⑥ラムサール条約登録湿地「志津川湾」の今とこれから ..	64
4. 参考資料	
公園計画図、管理運営計画書、ステップアッププログラム 2025、 公園計画書、指定動物・指定植物リスト	66
施設案内	67
関係行政機関リスト	68
自然保護官事務所歴代職員録	69
5. 結びに	
10周年に寄せて	71

2. 三陸復興国立公園について

2-1. 三陸復興国立公園の概要

2-2. 三陸復興国立公園誕生の経緯と10年のあゆみ

2-3. 三陸復興国立公園を代表する景勝地・観光地



自然の恵みと脅威、 人と自然との共生により 育まれてきた 暮らしと文化が 感じられる国立公園

鵜の巣断崖（田野畑村）

（１）基礎データ

指定年月日	陸域面積(ha)	海域面積(ha)	関係都道府県名
2013（平成 25）年 5 月 24 日※	28,539	72,835	青森県、岩手県、宮城県
○主な風景形式及び指定理由：日本最大の海食崖とリアス海岸 ○主な利用形態：海岸景観の探勝、みちのく潮風トレイル等のトレッキング、サップ船ツアー、味覚探訪			

※三陸復興国立公園としての指定日。前身である陸中海岸国立公園としての指定日は1955(昭和30)年5月2日。

（２）特徴

三陸復興国立公園は、東日本大震災により被災した三陸地域の復興に貢献するために、2013年5月に創設された国立公園である。

東北の太平洋側に位置し、青森県の種差海岸から岩手県の浄土ヶ浜、碓石海岸などを経て宮城県の牡鹿半島に至る南北約250kmに及ぶ海岸線を包含し、

北は太平洋に面した「海のアλπス」とも称される荘厳な断崖美、南部は入り組んだ地形が優美なリアス海岸が続く。

沿岸部には、被災地を南北に繋ぎ交流を深める道として青森県八戸市から福島県相馬市を結ぶ1000km超のロングトレイルであるみちのく潮風トレイルが設定されている。

(3) 自然の概要

—— 海域の生態系 ——

浅海域にはホンダワラ、アオサをはじめとした海藻類が優占する海藻藻場やアマモ場が形成され、海洋生物の生息場となっている。ほかにアイナメ、ソイ、ウニ、アワビなど水産資源としても重要な生物が多く生息している。

—— 動物 ——

特に海鳥の繁殖地として重要な地域となっており、日出島はクロコシジロウミツバメの、三貫島はオオミズナギドリ及びヒメクロウミツバメの集団繁殖地として国指定鳥獣保護区に指定されている。また、沿岸の崖地にはミサゴなどの猛禽類が生息している。



穴通船アドベンチャー（大船渡市）

—— 植物 ——

青森県内は海岸植物群落が主体の草原やお花畑が特徴的で、崖地、砂浜、シバ地、塩性湿地など変化に富む海岸線に応じて多様な植生が生育している。岩手県及び宮城県内では海岸線に沿って生息するアカマツが主体の落葉広葉樹を交えた林が見られる。環境に応じてスカシユリなどの海岸崖地植生やハマナスなどの砂浜植生が発達している。また、北山崎ではシロバナシャクナゲ群落、船越半島や椿島では暖地性のタブノキ原生林（船越半島がタブノキの北限）など、局所的に貴重な植生を見ることが出来る。



種差海岸（中須賀）のお花畑（八戸市）

(4) 文化

沿岸には漁港が多数あり、陸上の展望地からも漁船の往来がよく目に入る。リアス海岸となっている公園南部の海岸の湾内にはカキやホタテなどの養殖いかだやワカメ等の養殖ブイが多数浮かべられ、典型的な漁業地域の風景を呈している。岬の先端や集落近傍の高台には大小の神社がみられるほか、海

岸線に並ぶ漁師の番屋や日本家屋などが立ち並ぶ様子から、山と海が隣り合う雄大な自然環境の中に息づく、古くからの人々の営みが感じられる。

また、種差地区には、馬の放牧など、人の手が加わって維持されてきた広大なシバ草原が広がっている。



種差天然芝生地（八戸市）

三陸復興国立公園の創設とグリーン復興

環境省三陸復興国立公園推進チーム

出典：「国立公園」714号（平成25年6月1日発行）

三陸復興国立公園の誕生

2013年5月24日に三陸復興国立公園が指定され、翌日に青森県八戸市・階上町において記念式典が開催された。陸中海岸国立公園に種差海岸階上岳県立自然公園を編入して指定するものであり、今後、南部の宮城県石巻市・女川町の牡鹿半島まで及びその周辺の自然公園を段階的に再編成していくこととしている(図1)。



図1 東北地方太平洋沿岸の自然公園の再編成のイメージ



図2 リアス海岸（大槌町・鯨山山頂より）

三陸海岸はリアス式？ 北は隆起で南は沈降？

一般には「三陸海は、青森県八戸市の鮫崎から宮城県牡鹿半島までの海岸とされている※1。また、「三陸」という言葉は、明治初年の陸奥国の五分割により生まれた三つの「陸」のつく国（陸奥国、陸中国および陸前国）の総称であったものが、1896年の明治三陸大津波以降、その激甚災害地である北上山地東海岸地域に限定された。三陸海岸＝リアス海岸というイメージが一般的なようで、確かにわが国を代表するリアス海岸が存在するが、実際は岩手県宮古市を境に三陸海岸の南半分がリアス海岸(図2)で、北半分は海食崖の景観(図3)である。北上山地が太平洋に接している一連の地域にもかかわらず、このように大きく地形が異なる理由は、かつては「宮古市以北が隆起海岸、以南が沈降海岸であるため」、と説明されてきたが、現在は違う考え方がされている。三陸海岸は、東日本大震災のきっかけとなったプレート運動により全体



図3 海食崖（田野畑村・北山崎）

として隆起を続けている。宮古市の南北で大きく地形が異なる理由は、宮古市以南では海岸に直交する方向に、断層に由来して浸食を受けた谷が形成され、その谷に海水が侵入して湾が形成されたと考えられている※2。そのため、沈水海岸であっても、沈降海岸ではない。これらのことは、「三陸ジオパーク」の取り組みに代表される近年の目覚ましい地形地質学の進展により明らかとなった。なお、以前は地図帳や教科書に「リアス式海岸」と表記されていたが、近年は「リアス海岸」が正しいとされている。

三陸復興国立公園が目指すもの

陸中海岸国立公園は、岩手県田野畑村の北山崎に代表される豪大な海食崖景観が優れていることから1955年に指定され、2010年10月に公表した「国立・国定公園総点検事業」において、南北に拡張する方針が出されていた。これは、三陸海岸は海食崖景観も日本一の規模をもつものだが、前述のようにリ

アス海岸もわが国を代表する日本一の規模をもつとともに、北上山地が太平洋に接する地域であり、地形の形成史と地質的にみて一体の地域であったため、風景形式を海食崖から「海食崖とリアス海岸」に変更し、豪壮かつ優美な自然海岸の景観が傑出している三陸海岸全域に国立公園区域を拡張する、という狙いであった。

その再編作業を開始した矢先に震災が発災し、復興に貢献する必要性、自然の恵みだけでなく自然の脅威を学ぶことの必要性が加わり、また、第10回生物多様性条約締約国会議の成果である愛知目標のビジョン「自然と共生する世界」の実現に向けた挑戦といったさまざまなことを背景に、「三陸復興国立公園の創設を核としたグリーン復興のビジョン」を2012年5月に環境省が策定し、これに基づき三陸復興国立公園の指定に至った。三陸復興国立公園のテーマは「自然の恵みと脅威、人と自然との共生により育まれてきた暮らしと文化が感じられる国立公園」である。

(1) 復興に貢献する！

東北地方太平洋沿岸の地域を支える主要産業である観光業と水産業は、いずれも豊かな自然環境の上に成立している。例えば、一級の観光資源である北山崎の迫力ある大断崖は地震・津波をもたらすプレート運動により形成された。また、沿岸の豊かな水産資源は、リアスの複雑な海岸地形、複雑な潮流、森からもたらされる豊かな栄養分等に支えられている。度重なる津波にも負けず、この地にはるか昔から人々が暮らしを営んできたのも、豊かな自然あってこそであった。ならば、復興に当たって、この豊かな自然環境を守りつつ、資源として活用することが、地域の潜在力を十分に活かした復興であると考えた。

国立公園の目的は自然の保護と適切な利用だが、復興に当たっては適切な利用の推進にこれまで以上に力を注ぐことで観光を振興し、かつ、エコツーリズム等の活動の中で、また、「食」を通じて、農林水産業の復興にも微力ながら貢献していくことを目指している。特に「食」は、利用者が地域に訪れる際に大きなインセンティブとなるが、多くの食材は豊かな自然環境に支えられていて、国立公園とのつながりが説明しやすいこともあるため、三陸復興国立公園では強く意識している（図4）。

被災地は震災前から過疎が進んでいたが、農災により一層過疎化し、地域の活力が失われることが懸念されている。これは、例えばホテルを始めとする公園事業の多くが地域の方々に支えられている国立公園にとっても死活問題であるし、長きに渡って営まれてきた人と自然がともに生きる暮らしや文化といった日本の宝が失われることにもなる。長距離自然歩道「みちのく潮風トレイル」の想定コース約700kmを踏破した大学生モニターが、被災地の

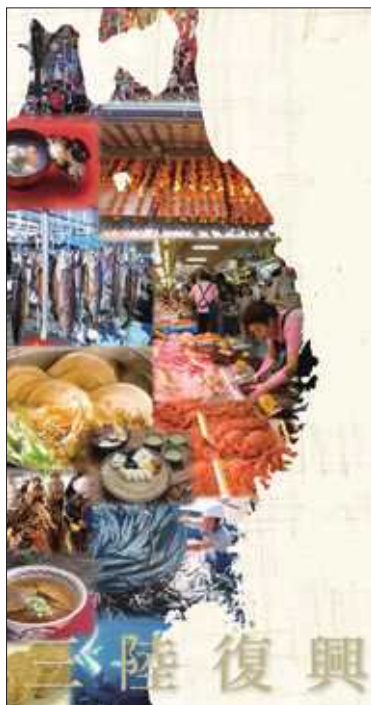


図4 グリーン復興プロジェクトのパンフレット
（食と文化の写真を採用した）

魅力として一番に挙げたものは「東北の人の温かさ」であった。行く先々で、震災に負けずに頑張る人に出会い、その暮らしを体感し、地域の方々の温かさにふれ、互いに励ましあい元気をもらいう、ということがトレイルの上で繰り返された※3。三陸復興国立公園では、トレイルやエコツーリズム等、さまざまな取り組みの中で、「人と人の交流」が深まり、地域が元気になるための工夫をしていきたい。

(2) 自然の脅威を学び伝える！

多くの方が震災を目の当たりにして、自然は恵みだけでなく、時として大きな脅威をもたらすことを再認識させられたと思う。自然を理解し、人と自然

がともに生きることを意味を考えるきっかけの一つを、訪れた人を感じてもらえるような国立公園を目指している。国立公園の被災した利用施設を遺構として保存し、津波のスケールを肌で感じることが出来る広場として再整備することや、各地に点在する津波の被害から逃れるための知恵や教訓を後世に引き継ぐための取り組みを進めており、「三陸ジオパーク」と連携して取り組んでいく。

また、この地域での自然の脅威には、夏に冷害をもたらす「ヤマセ」もあり、やはり自然とともに生きる人々の暮らし、土地利用、文化がみられる。例えば、種差海岸の美しい海岸の花々は、ヤマセの冷涼な気候により維持されている。種差海岸の芝生地の美しい景観も、冷涼な気候が馬の放牧に適していたことからであり、ヤマセが関連している。また、B-1 グランプリで脚光を浴びる「せんべい汁」や「そばかけ」のような米以外の穀物を活かす暮らしにもヤマセとのかかわりがみられる。国立公園の中でもこのようなつながりを伝えていきたい。

新しく国立公園になった 種差・階上海岸と階上岳

新しく国立公園に編入された地域は、青森県八戸市から階上町までの「種差・階上海岸」と、階上町の「階上岳」の二つの地域に分かれている。種差・階上海岸は、八戸市の種差海岸や階上町の小舟渡にみられるシバ草原の開放的で美しい景観、八戸市中須賀のお花畑、鳴き砂で有名な大須賀、ウミネコが人を恐れないため繁殖活動を間近で観察できる蕪島、クロマツ林、海食崖等、変化に富んだ景色が見られ、トレイルを歩く者を飽きさせない。この春から週末に一般開放された鮫角灯台では、競走馬を飼育する牧場を展望でき、この地域がかつて馬産地であったことを

実感できる場所である。また、種差海岸は司馬遼太郎が「街道をゆく 陸奥のみち」の中で「どこかの天体から人がきて地球の美しさを教えてやらねばならないはめになったとき、一番にこの種差海岸を案内してやろうと思った」と絶賛していることをはじめ、東山魁夷がその代表作「道」を描いた地であること、「大正の広重」と称された鳥瞰図作家の吉田初三郎がアトリエ「潮観荘」を構えたことなど、多くの文人画家等に愛され、彼らにインスピレーションを与え続けてきた地でもある。

階上岳は、なだらかな山容から「臥牛山」とも呼ばれ、かつては漁師の方が海で山の形等を頼りに自分の位置や方向を定める「山たて」の目標として活用していた山である。標高740mほどの山で、標高625mの大開平まで車で行くことが可能であり、そこから山頂まで手軽に登ることができる。6月には大開平に群生するヤマツツジが美しく萌え咲き、山頂からは種差・階上海岸と太平洋、北上山地、八甲田連峰等が遠望できる。階上岳にはオートキャンプ場が整備されているほか、山麓では地元名産の「階上ソバ」も味わえる。階上ソバは階上早生という、この地に古くから伝わる在来種で、大正2年の冷害による大凶作でも収量をあげるなど、ヤマセがもたらすこの地の気候風土に適応し、地域の人々とともに歩んできた品種である。

グリーン復興プロジェクトの進捗

グリーン復興プロジェクトは、三陸復興国立公園の創設のほか、全部で七つのプロジェクトからなる。ここでは「みちのく潮風トレイル」と「自然環境モニタリング」を紹介する。進捗状況は環境省 WEB サイトでも紹介している※4。

(1) みちのく潮風トレイル

2012年12月に、トレイルの基本計

三陸復興国立公園の創設を核としたグリーン復興について

東北地方環境事務所国立公園課

出典：「国立公園」791号（令和3年4月1日発行）

はじめに

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震による大規模な地震・津波・地盤沈下は、2万人近い死者や約2600人の行方不明者を出すなど人々の生命や財産に甚大な被害をもたらしただけでなく、地域社会や自然環境にも大きな影響を与えた。私たちは改めて、自然は恵みだけをもたらすものではなく、時として大きな脅威をもたらすということを再認識させられ、人と自然の共生のあり方について考え直すことを余儀なくされる転換点ともいえる状況に直面した。

環境省は2011年5月18日に「東日本大震災からの復興に向けた環境省の基本的対応方針」として、東北地方太平洋沿岸の自然公園を「三陸復興国立公園（仮称）」として再編成して地域再生に貢献することを公表した。

また、同年7月29日に東日本大震災復興対策本部が策定した「東日本大震災からの復興の基本方針」の中でも、三陸復興国立公園の創設等が復興事業として位置付けられた。

こうした背景のもと、2012年5月7日、中央環境審議会自然環境部会の答申で示された提言を踏まえ、環境省は取り組みの方向性をまとめた「三陸復興国立公園の創設を核としたグリーン復興のビジョン」を策定し、復興に取り組んできた。本稿では、その取り組みの概要について報告する。

「三陸復興国立公園の創設を核としたグリーン復興のビジョン」の概要

（一）対象地域

青森県八戸市から福島県相馬市までの東北太平洋沿岸地域を対象とした。

（二）基本理念

三陸復興国立公園の創設をはじめとした取り組みを通じて、森・里・川・海のつながりにより育まれてきた自然環境と地域のくらしを後世に伝え、自然の恵みと脅威を学びつつ、それらを活用しながら復興することを『国立公園の創設を核としたグリーン復興 一森・里・川・海が育む自然とともに歩む復興』と位置付け、基本理念とした。

（三）基本方針

①自然の恵みの活用

自然の恵みとして、自然環境のみならず、この地域ならではの自然とともに生きるくらしや文化を観光の中で活かしていくことを基本方針とした。

②自然の脅威を学ぶ

過去にも記録され、今後も繰り返起こりうる地震や津波といった自然の脅威について学ぶことを基本方針に位置付けた。

③森・里・川・海のつながりを強める

この地域の優れた自然景観や、地域のくらしを支える豊かな生態系を保全・再生することで地域の持続的発展の礎とすることを基本方針に位置付けた。

（四）具体的取り組み

これらの基本理念や基本方針を踏まえ、次の7項目を具体的な取り組み事項（グリーン復興プロジェクト）として復興状況にあわせて段階的に行うこととした。

①三陸復興国立公園の創設（自然公園の再編成）

陸中海岸国立公園を中核として、周辺の自然公園を再編成して「三陸復興国立公園」とし、地域と連携して適切な利用を推進し、地域振興に貢献する。

②里山・里海フィールドミュージアムと施設整備

被災した利用施設の復旧・再整備を迅速に進め、観光拠点の再生、自然の恵みや地域のくらしを紹介したり、自

画を公表して以降、NHK朝の連続ドラマ「あまちゃん」で盛りあがる岩手県久慈市を先行モデルとして、地域の方々とワークショップを繰り返し、路線の検討を行った。また、前述の大学生モニターが踏破したことは、全国ニュースをはじめ大きくマスコミで取り上げられ、トレイルの設定への理解の促進、全国的な関心の向上に大きく貢献した。2013年秋には、青森県八戸市～岩手県久慈市の区間について開通を目指している。

（2）自然環境モニタリング

ラムサール条約湿地潜在候補地※5は、東北地方太平洋沿岸に7カ所あるが、震災後の資質を確認するための検討会を2012年11月に開催した。その結果、すべての候補地において震災前に満たしているとされた基準のうち、最低一つは維持されていると考えられた。候補地の自然環境は現在も変化を続けている状況であり、モニタリングを継続し、長期的な情報収集に努めることとしている。

また、砂浜・泥浜海岸の汀線変化状況の調査、震災前後の植生図の作成、干潟・アマモ場・藻場・海鳥繁殖地等

における定点調査（モニタリングサイト1000も含む）等の自然環境調査を実施した。これらの調査結果と、環境省以外の主体が実施した調査状況の情報を合わせて、生物多様性センターWEBサイト※6で公開している。

三陸「復興」国立公園

前述のとおり、「三陸」という地名は明治三陸大津波の時に生まれたものである。陸中海岸国立公園の指定のきっかけとなったのは、昭和三陸大津波の被害状況を調査に来た学術調査団のほとんどが国立公園審議会委員も兼任していたことから、当時の宮古町長が浄土ヶ浜を案内し、国立公園の指定要望を行ったことであった。そして、今回の三陸での大津波をきっかけに三陸復興国立公園が創設された。地震・津波のたびに地域の人々は立ち上がり、国立公園もそれに寄り添ってきた。三陸復興国立公園の名称は復興の状況をみて将来見直すこととしている。国立公園の名称から「復興」がなくなる日を目指して、地域の方々に認めてもらえるような国立公園にしていきたい。

〈参考文献〉

※1 広辞苑第六版、岩波出版

※2 大石雅之：「網取断層」と三陸海岸の自然史科学～岩手県における地球科学的俗説排除の必要性について～、岩手の地学第34号、2005年12月

※3 みちのく潮風トレイル：https://tohoku.env.go.jp/mct/

※4 三陸復興国立公園の創設を核としたグリーン復興：http://www.env.go.jp/jishin/park-sanriku/

※5 ラムサール条約湿地としての国際基準を満たすと認められる湿地を全国から172カ所選定したもの（2010年9月、環境省公表）。そのうち、自治体等から登録への賛意が得られ、国内法による保護担保措置の確保が整ったものから、ラムサール条約湿地への登録を進めていく

※6 東北地方太平洋沿岸地域自然環境情報：http://www.biodic.go.jp/Tohoku_Portal/

三陸復興国立公園推進チーム

東日本大震災の発災を受け、環境省自然環境局内に2011年8月30日付けで設置された課室横断型のプロジェクトチーム。現在は解散。

然の脅威を学ぶ施設の整備を行う。

また、国立公園を核とする里山里海などの地域をフィールドミュージアムと位置付けて、拠点整備や自然体験活動推進、エコツーリズム支援等を行い地域活性化に貢献する。

③地域の宝を活かした自然を深く楽しむ旅（復興エコツーリズム）

地域固有の宝を持続的に活用し、自然を深く楽しむ旅としてエコツーリズムを推進する。

④南北につなぎ交流を深める道（東北海岸トレイル）

地域の自然環境や地域の暮らし、震災の痕跡、利用者と地域の人々など、さまざまなものを結ぶ道を長距離自然歩道として設定する。

⑤森・里・川・海のつながりの再生

豊かな生態系を国立公園等保護地域として保全することと、森里川海のつながりの重要性などについて学ぶ場の整備やエコツーリズムなどの体制づくりを進める。

⑥持続可能な社会を担う人づくり（ESD）の推進

自然環境の成り立ちや、自然の脅威と防災・減災などをテーマに持続可能な社会を担う人づくりを進める。

⑦地震・津波による自然環境への影響の把握（自然環境モニタリング）

地震や津波による自然環境への影響の調査や変化し続ける自然環境のモニタリングを行う。

取り組み状況

①三陸復興国立公園の創設（自然公園の再編成）

2013年5月、陸中海岸国立公園に青森県の種差海岸階上岳県立自然公園を編入し、「三陸復興国立公園」として創設した。

さらに、2015年3月には、宮城県の南三陸金華山国定公園の区域を編入し、三陸復興国立公園は三陸海岸全域にまたがる日本最大級の高食崖とリアス海岸

の国立公園となった。その後、2017年には、志津川湾の海域の一部を海城公園地区として指定する等の公園計画変更を行った。このとき海城公園地区として指定された海域は、2018年10月にラムサール条約湿地として登録されている。

現在、三陸復興国立公園では、種差海岸階上岳地域や旧陸中海岸国立公園区域について復興事業等の社会条件や震災後の自然環境の変化等に対応すべく公園計画の点検作業に着手している。

②里山・里海フィールドミュージアムと施設整備

被災した施設を再整備して復旧するとともに、被災園地の震災遺構（中の浜メモリアルパーク）としての再整備や、新たに国立公園に編入された種差海岸階上岳地域や南三陸金華山地域で、地域の自然や暮らしなどを紹介した博物展示施設等の新規拠点整備を行った。当初計画した整備はおおむね終了したが、今後も博物展示施設で地域の自然や暮らし、地震や津波の脅威等について、もっと学べるよう改修するなど施設整備を通じた魅力的な公園づくりを継続していく。

石巻市、南三陸町および登米市の三陸復興国立公園区域を中心とした、豊かに広がる川・海・森・里の一角をフィールドミュージアムと位置付け、2013年度から「フィールドミュージアム事業」を行った。事業として自然体験プログラムの検討や自然体験リーダーの育成研修を行い、地域住民の方々などが研修に参加した。現在、修了者の一部が独自に団体をつくり、自然体験活動の提供を通して地域振興に貢献している。

また、フィールドミュージアムでの自然体験活動の拠点施設として、南三陸・海のビジターセンターおよび石巻・川のビジターセンターを整備し、石巻市や南三陸町をはじめ関係機関とともに「フィールドミュージアム運営協議会」を組織して、両ビジターセンターを拠点に自然体験プログラムを実施し

ている。活動開始から4年間で約1600人がプログラムに参加した。今後も、より多くの方々に参加してもらえるよう関係機関が連携して取り組みを進めていく必要がある。

③地域の宝を活かした自然を深く楽しむ旅（復興エコツーリズム）

2012年度から2015年度までの4年間にわたり、岩手県、宮城県および福島県の4市2町において、プログラム作成検討、ガイド育成、モニターツアー、自立的な推進体制づくりなど、地域の特徴や状況に応じた内容の「復興エコツーリズムモデル事業」を実施し、地域によるエコツーリズムの推進支援を行った。

④南北につなぎ交流を深める道（東北海岸トレイル）

2019年6月、東北太平洋岸自然歩道（みちのく潮風トレイル）が全線開通した。青森県八戸市蕪島から福島県相馬市松川浦までの約1000kmに及ぶルートの設定は、地域の方々が参画して行われた。

コロナ禍で2020年度の利用者数は伸び悩んでいるものの、それ以前は2017年度から徐々に利用者が増加してきており、今後、沿線地域の振興に貢献することが期待されている。既にNational Geographic Magazineで紹介されたり、英国のトラベルライターの団体（BGTW）が選ぶ、International Tourism Awards 2020の“Best Wider World Tourism Project”のファイナリストに選出されるなど海外からの注目も集まりつつある。

今後は、地域やハイカーの愛着によって支えられるトレイルとなるため、地域とともにトレイルを管理する体制の強化や、地域がハイカーを応援しハイカーが地域に学び、地域づくりに貢献する仕組みづくりが必要と考えている。また、普及啓発活動や他機関が行う施策との連携を通じて、さらに多くの人々にトレイルを知ってもらうことも必要だ。

⑤森・里・川・海のつながりの再生

アマモ場が多く消失した岩手県宮古湾で、2012年度と2013年度にわたって、宮古湾の現況や再生目標等を記した宮古湾里海復興プラン」や「里海復興プラン策定の手引き」を策定した。

また、2017年に行った三陸復興国立公園の公園計画変更では、高台移転等により居住者が離れて今後の土地利用が定まっていない地域を公園に編入した。この地域での流域再生の実施は今後の検討課題となっている。

⑥持続可能な社会を担う人づくり（ESD）の推進

2012年度から2014年度の3年間にわたり、ESDプログラム作成や作成したプログラムの実践促進、情報発信等を行った。

⑦地震・津波による自然環境への影響の把握（自然環境モニタリング）

2012年度から東日本大震災後の自然環境の変化を把握するための調査を行っている。

これから

これまでの取り組みにより、地域経済活動の再生や交流人口の増加に一定程度は貢献できたと考えている。また、取り組みを進める中で、利用者が三陸の魅力を再発見する機会、地域の人々が利用者と接してふるさとの魅力を再認識する機会や、住民が自ら参画してグリーン復興を進める機会を提供できたのではないかな、と思う。

震災後10年が経過し当初の復興期間が終わるが、三陸復興国立公園を核としたグリーン復興はこれで終わりではないだろう。フィールドミュージアムやみちのく潮風トレイルをはじめとする取り組みは、もっと地域の経済、社会や人々の心に良い影響をもたらせると考えている。三陸復興国立公園を核としたグリーン復興で、地域の人々にも、利用者にも、自然にも良い地域づくりのモデルを示したい。

三陸復興国立公園のあゆみ

2. 三陸復興国立公園について

2・2. 三陸復興国立公園誕生の経緯と10年のあゆみ

1922(大正 11)年	3月	「蕪島ウミネコ繁殖地」(八戸市)が国の天然記念物に指定
1931(昭和 6)年	4月	国立公園法制定
1933(昭和 8)年	3月	三陸大津波襲来 学術調査団が宮古を視察。「浄土ヶ浜国立公園」指定について陳情を行う 八戸市が種差海岸の国立公園指定を陳情
1934(昭和 9)年	1月	「陸前江ノ島のウミネコおよびウトウ繁殖地」(女川町)が国の天然記念物に指定
	12月	「椿島ウミネコ繁殖地」(陸前高田市)が国の天然記念物に指定
1935(昭和 10)年	8月	「横山のウグイ生息地」(登米市)が国の天然記念物に指定
	12月	「三貫島オオミズナギドリ及びヒメクロウミツバメ繁殖地」(釜石市)と「日出島クロコシジロウミツバメ繁殖地」(宮古市)が国の天然記念物に指定
1936(昭和 11)年	12月	「蛇ヶ崎」(陸前高田市)が国の天然記念物に指定
1937(昭和 12)年	6月	「碁石海岸」(大船渡市)が国の名勝及び天然記念物に指定
	12月	「種差海岸」(八戸市)が国の名勝に指定
1938(昭和 13)年	12月	「岩泉湧窟及びコウモリ」が国の天然記念物に指定
1939(昭和 14)年	9月	「館ヶ崎角岩岩脈」(大船渡市)と「崎山のローソク岩」(宮古市)と「崎山の潮吹穴」(宮古市)が国の天然記念物に指定
1940(昭和 15)年	11月	「高田松原」(陸前高田市)が国の名勝に指定
1943(昭和 18)年	8月	「珊瑚島」(大船渡市)が国の名勝に指定
1948(昭和 23)年	6月	宮古観光協会設立 宮古市長を中心として周辺の関係市町村が連携し、国立公園指定運動を始める
	7月	国立公園中央審議会委員・田村剛博士が視察
	9月	同審議会委員・本田正次博士が視察
1949(昭和 24)年	8月	同審議会委員・武田久吉博士、村井米子博士が視察
	10月	岩手県観光連盟において、国立公園候補地に「八幡平」を、国定公園候補地に「三陸海岸」を決定
1950(昭和 25)年	9月	毎日新聞主催「新日本観光地百選」にて「三陸フィヨルド」が海の部2位入選。一躍脚光を浴びる
1951(昭和 26)年	11月	国立公園中央審議会に対し、国立公園候補地の選定を諮問
1952(昭和 27)年	7月	同審議会会長・下村海南博士一行が宮古訪問 国立公園として極めて有望と発言
	8月	同審議会から答申「国立公園候補地となる」
1953(昭和 28)年	6月	種差海岸県立自然公園(蕪島～大久喜)指定
1954(昭和 29)年	4月	「浄土ヶ浜」(宮古市)が県の第1号の名勝に指定 「船越海岸」(山田町)が国の名勝に指定 「タブノキ自生地」(山田町)と「田野畑シロバナシャクナゲ群落」(田野畑村)が県の天然記念物に指定

	6月	国立公園中央審議会委員・田村剛博士一行が視察
	8月	同審議会委員・辻村太郎博士一行が調査
	8月	同審議会委員・吉坂俊蔵博士一行が調査
	8月	新宿御苑において国立公園中央審議会が開催され、「三陸海岸」を「陸中海岸」と名称を改め国立公園に内定
1955(昭和 30)年	5月	陸中海岸国立公園指定〈厚生省告示 110 号〉 下閉伊郡普代村松磯から釜石市大根崎まで 宮古市において陸中海岸国立公園指定祝賀会が開催
1957(昭和 32)年	5月	「樋口沢ゴトランド紀化石産地」(大船渡市)が国の天然記念物に指定
	6月	国立公園法が廃止され、自然公園法が制定
1959(昭和 34)年	3月	「佐賀部のウミネコ繁殖地」(田老町)が県の天然記念物に指定
	8月	「巨釜半造」(唐桑町)が県の名勝に指定 「岩井崎石灰岩化石」(気仙沼市)が県の天然記念物に指定
	9月	陸中海岸国立公園協会設立
	10月	厚生省陸中海岸国立公園宮古管理官事務所開設
1960(昭和 35)年	5月	チリ地震津波襲来
1961(昭和 36)年	12月	陸中海岸国立公園に岩手県南部及び唐桑・気仙沼を追加指定するよう関係市町村が運動
1964(昭和 39)年	6月	陸中海岸国立公園区域拡張〈厚生省告示 243 号〉 釜石市大根崎から気仙沼市岩井崎の拡張 「八景島暖地性植物群落」(石巻市)が国の天然記念物に指定
1966(昭和 41)年	3月	「田野畑の白亜紀化石産地」(田野畑村)が県の名勝に指定 「椿島暖地性植物群落」(南三陸町)が国の天然記念物に指定
1969(昭和 44)年	6月	「青松島」(陸前高田市)が県の名勝及び天然記念物に指定 「イワタバコ北限自生地」(田野畑村)が県の名勝に指定
1970(昭和 45)年	11月	陸中海岸国立公園に久慈・野田を追加指定するよう関係市町村が運動
1971(昭和 46)年	1月	陸中海岸国立公園区域拡張〈厚生省告示 10 号〉 久慈市北侍浜から野田村玉川の拡張 気仙沼市及び唐桑町地先海面に海中公園地区(3ヶ所)を指定
	7月	環境庁設置
1974(昭和 49)年	4月	宮古国民休暇村開設
	5月	天皇・皇后両陛下が宮古市にご滞在、陸中海岸の自然を鑑賞される
	10月	種差海岸県立自然公園が階上海岸・階上岳まで拡張され、種差海岸階上岳県立自然公園へと改称
1975(昭和 50)年	3月	宮古ビジターセンター整備
	8月	第 17 回自然公園大会が宮古で開催、常陸宮殿下、同妃殿下ご出席される 「歌津館崎の魚竜化石産地及び魚竜化石」(南三陸町)が国の天然記念物に指定
	10月	環境庁陸中海岸国立公園碁石海岸管理官事務所開設
1976(昭和 51)年	12月	「イヌワシ繁殖地」(石巻市・岩泉町)が国の天然記念物に指定

2. 三陸復興国立公園について

2・2. 三陸復興国立公園誕生の経緯と10年のあゆみ

1979(昭和 54)年	3 月	南三陸金華山国定公園指定
1984(昭和 59)年	4 月	三陸鉄道開業
	7 月	第 26 回自然公園大会が気仙沼市で開催、常陸宮殿下、同妃殿下ご出席される
1985(昭和 60)年	5 月	陸中海岸国立公園指定 30 周年記念式典、祝賀会等を宮古市で開催
1987(昭和 62)年	3 月	読賣新聞主催「新日本観光地 100 選」にて「八戸」(八戸市)が入選
1988(昭和 63)年	3 月	陸中海岸国立公園管理計画策定
1991(平成 3)年	2 月	北山崎ビジターセンター開館
1992(平成 4)年	7 月	宮古市・釜石市及び山田町を会場に、三陸海の博覧会が開催
	9 月	「三王岩」(田老町)が県の天然記念物に指定
1994(平成 6)年	7 月	碓石海岸管理官事務所が大船渡管理官事務所に改組
	11 月	陸中海岸国立公園に係る公園計画の再検討〈環境庁告示第 83 ～ 87 号〉
1995(平成 7)年	3 月	陸中海岸国立公園管理計画改定
1996(平成 8)年	7 月	「八戸湾・蕪島のウミネコ」(八戸市)、「碓石海岸・雷岩」(大船渡市)及び「北上川河口のヨシ原」(石巻市)が残したい日本の音風景 100 選に選定
2000(平成 12)年	3 月	陸中海岸国立公園の公園計画の変更(第 1 次点検)〈環境庁告示第 26 ～ 28 号〉
	4 月	宮古管理官事務所が宮古自然保護官事務所に、大船渡管理官事務所が大船渡自然保護官事務所に改組
2001(平成 13)年	1 月	中央省庁再編により、環境庁が環境省へ組織再編
	10 月	「浄土ヶ浜の潮のかおり」(宮古市)及び「金華山の原生林と鹿」(石巻市)がかおり風景 100 選に選定
	12 月	「陸中リアス海岸の湾奥沿岸湿地群」(宮古市・山田町・大槌町・釜石市など)、「三陸沿岸の外洋性藻場」(山田町・大槌町・釜石市)、「広田湾」(陸前高田市・気仙沼市)、「南三陸海岸沿岸」(気仙沼市)、「志津川湾」(南三陸町)、「万石浦」(石巻市)及び「北上川(河口域)・長面浦」(石巻市)が日本の重要湿地 500 として選定
2003(平成 15)年	3 月	陸中海岸国立公園管理計画改定
2005(平成 17)年	1 月	陸中海岸国立公園の公園計画の変更(第 2 次点検)〈環境省告示第 3 ～ 5 号〉
	3 月	陸中海岸国立公園中部地区パークボランティア活動運営基本計画策定
		陸中海岸国立公園南部地区パークボランティア活動運営基本計画策定
2010(平成 22)年	4 月	浄土ヶ浜ビジターセンター開館。宮古ビジターセンターは休憩施設(宮古姉ヶ崎フィールドハウス)として活用
	10 月	「国立・国定公園総点検事業」において、青森県の蕪島から宮城県の牡鹿半島までの三陸海岸が大規模拡張候補地として選定
2011(平成 23)年	3 月	東日本大震災発災
	7 月	東日本大震災復興対策本部が策定した「東日本大震災からの復興

2012(平成 24)年	3 月	の基本方針」に三陸復興国立公園の創設等が明記
		中央環境審議会自然環境部会答申「三陸地域の自然公園等を活用した復興の考え方」
	4 月	八戸自然保護官事務所開設
	5 月	「三陸復興国立公園の創設を核としたグリーン復興プロジェクトのビジョン」を策定
2013(平成 25)年	5 月	陸中海岸国立公園の公園計画の変更(第 3 次点検)〈環境省告示第 50 ～ 53 号〉
		八戸市蕪島から階上町小舟渡の拡張、公園名称変更
		三陸復興国立公園創設
	9 月	三陸ジオパーク(八戸市から岩手県沿岸を縦断して気仙沼市まで)が日本ジオパークとして認定
	11 月	みちのく潮風トレイルが八戸 - 久慈間で先行開通
2014(平成 26)年	4 月	碓石海岸インフォメーションセンター開館
	5 月	震災メモリアルパーク中の浜開園
	7 月	種差海岸インフォメーションセンター開館
2015(平成 27)年	3 月	三陸復興国立公園の公園計画の変更(三陸復興国立公園として最初の点検)〈環境省告示第 53 ～ 57 号〉
		気仙沼市から石巻市牡鹿半島の拡張
	4 月	石巻自然保護官事務所開設
	5 月	三陸復興国立公園指定植物の指定
2016(平成 28)年	3 月	政府が「明日の日本を支える観光ビジョン」を策定。ビジョンの柱の一つとして国立公園が位置づけられ、「国立公園満喫プロジェクト」の取組が開始
	4 月	日本の重要湿地 500 の見直しが行われ、「生物多様性の観点から重要度の高い湿地」としてすべて再選定
	10 月	南三陸・海のビジターセンター開館
	12 月	石巻・川のビジターセンター開館
2018(平成 30)年	3 月	三陸復興国立公園の公園計画の変更(一部変更)〈環境省告示第 19 ～ 22 号〉
		石巻市祝浜及び南三陸町志津川湾の編入、海域公園地区の拡張等
	10 月	「志津川湾」(南三陸町)がラムサール条約湿地に登録
2019(令和元)年	6 月	みちのく潮風トレイルが全線開通
	9 月	牡鹿半島ビジターセンター開館
2022(令和 4)年	11 月	三陸復興国立公園満喫プロジェクト推進協議会設立
2023(令和 5)年	6 月	名取市でみちのく潮風トレイル開通 5 周年イベントを開催
		みちのく潮風トレイル協議会設立
	8 月	宮古姉ヶ崎フィールドハウス解体
	9 月	八戸市により「三陸復興国立公園 10 周年記念シンポジウム～持続可能な利用と次世代への継承～」が開催
	12 月	三陸復興国立公園ステップアッププログラム 2025 策定

三陸復興国立公園を代表する景勝地・観光地

青森県



■ 蕪島（蕪嶋神社） 八戸市

古くから商売繁盛、漁業安全の守り神として信仰を集めている蕪嶋神社。ウミネコの繁殖地として国の天然記念物にも指定されており、毎年3万羽から4万羽のウミネコが飛来する。全長1000kmを超える長距離自然歩道「みちのく潮風トレイル」の北の起点・終点になっている。



■ 種差海岸（種差天然芝生地） 八戸市

波による侵食でできた海食崖や奇岩、なだらかな海成段丘、松林、砂浜など、変化に富んだ景観が特徴で、波打ち際まで天然の芝生が敷き詰められた「天然芝生地」は、種差海岸を代表する景観地。一帯では約650種を超える植物が自生し、多種多様な植物を鑑賞することができる。



■ 階上岳 階上町

北上山地最北の山であり、東日本大震災後、階上海岸とともに三陸復興国立公園に指定された。標高740mの山頂からは、海岸線を広く望むことができ、高標高部には天然のヤマツツジが群生し、5月下旬から6月上旬には朱色の絨毯を敷き詰めたような景色が広がる。なだらかな山の形が牛が寝そべっているように見えることから、地元では臥牛山（がぎゅうざん）とも呼ばれ、人々に親しまれている。

岩手県



■ 小袖海岸（小袖海女センター） 久慈市

海岸段丘の段丘崖、花崗岩の岩礁、海食洞など自然の植生が織り成す風景が広がる小袖海岸。朝の連続テレビ小説でも有名になった小袖海女センターは「北限の海女」で知られる観光拠点で、夏季には、海女による素潜り実演で採れた殻つきウニや海鮮の磯焼きを食べることができる。



■ 十府ヶ浦海岸 野田村

紫色の小豆砂におおわれ、ゆるやかな弧を描いた3.5km続く長大な海岸線。切り立った断崖が続く三陸海岸では珍しく貴重な砂浜で、千年以上の昔から歌枕に多く登場した名勝の地。付近にはハマナスやハマエンドウなどの群生地も見られ、彩り豊かな海岸で知られる。



■ 黒崎 普代村

高さ100m以上の垂直の断崖が海へ落ち込む、北緯40°に位置する岬。周辺は、自然歩道の起点にもなっており、じっくりと自然を満喫することができる。岬の突端には、陸中黒埼灯台が立ち、展望所からは約20km先までの海岸線が一望できる。



■ 北山崎 田野畑村

200mもの断崖が8kmに渡って続く三陸を代表する景勝地。日本交通公社の「自然資源・海岸の部」で最高ランクに唯一格付けされた、日本一美しい風景が広がる。やませの影響で夏でも冷涼な北山崎は、本来高地に咲くシロバナシャクナゲを見ることができる。



■ 鵜の巣断崖 田野畑村

崖の中腹にウミウが巣をつくることから名づけられた。高さ200mもの断崖が5列に連なる絶景が広がり、浅い入り江の白波が控えめに打ち寄せる様子は、レースの縁取りのような美しさ。巨大な屏風のように立つ堂々たる断崖とのコントラストが北山崎とは違う趣となっている。



■ 熊の鼻 岩泉町

熊の顔と鼻に見えることから名付けられた小本海岸にある景勝地。原地山層という白亜紀前期の地層が、波の浸食によって海食洞窟が開いており、三陸復興国立公園にある珍しいその風景は、対岸の「熊の鼻展望台」から望むことができる。



三王岩 宮古市

田老地区にある海上に突き出た高さ50mほどの岩塔。男岩、女岩、太鼓岩の3つの岩塔からなり、岩手県の天然記念物に指定されている。1億1千万年前の白亜紀前期の地層が明瞭に確認でき、アンモナイトなどの化石を産出する場所としても知られている。



浄土ヶ浜 宮古市

三陸を代表する景勝地。その昔、地元の僧侶が、「さながら極楽浄土のごとし」と感嘆したことに由来している。穏やかなさざ波、鋭く尖った白い岩肌と松の緑、海の群青とのコントラストが美しい海岸は、環境省の「日本の快水浴百選・海の部特選」にも選ばれている。夏には海水浴に多くの人々が訪れ、周囲の自然歩道では四季の草花を観察できる。



鯨ヶ崎（鯨ヶ崎灯台） 宮古市

重茂半島の東側、本州最東端の岬「鯨ヶ崎（とどがさき）」）。アカマツの巨木や自然のままの美しい海岸が見られる三陸の秘境ともいえる場所。岬の上に立つ「鯨ヶ崎灯台」からは、水平線を遠くまで見渡せることができ、地球が丸いことを実感できる。



霞露ヶ岳 山田町

東北百名山の一つ「霞露ヶ岳」。海拔0mからの海側の登山道では、“赤平金剛”の名を持つ高さ300mの崖をはじめ、道中も随所で海岸美を楽しむことができる。また夏季には、やませが吹き、冷涼な地で育つブナの原生林が広がっている。



蓬莱島 大槌町

ひょうたん島として町民に親しまれている「蓬莱島」。島内には弁財天が祀られている祠があり、古くから豊漁と安全を祈願する近隣漁師の信仰の対象となってきた。灯台のそばにはオットセイの飼育塔も建てられている。



御箱崎（千畳敷） 釜石市

箱崎半島の先端に位置する御箱崎までは、自然歩道が整備されており、尾根沿いの歩道からは、釜石湾に浮かぶ三貫島や大槌湾を望むことができる。御箱崎の先端には、花崗岩の巨岩が累々と積み重なる千畳敷と呼ばれる岩礁帯があり、三陸を代表する景勝地となっている。



碁石海岸（穴通磯） 大船渡市

自然が造りだした荒々しい奇岩や洞穴と松林が美しい碁石海岸。なかでも海水の浸食によって岩に大きな3つ穴が開いた「穴通磯」は絶景。碁石浜にはその名の通り、波によって磨かれたなめらかな玉砂利が敷き詰められていて、周囲は樺の名所として知られる。



高田松原 陸前高田市

広田湾に面した長さ約2kmの砂浜海岸には、高田松原と呼ばれる約7万本の松林が広がっていたが、東日本大震災の津波でその多くが倒された。唯一奇跡的に残った一本は「奇跡の一本松」として枯死後もモニュメントとして保存され、海岸では松原再生に向けての活動が行われている。

宮城県



龍舞崎 気仙沼市

気仙沼大島の最南端に位置する景勝地。岬の先端から望む迫力ある景色と、太平洋からの潮風が心地よいスポットで、目の前には海食による男性的な岩礁景観が広がり、そこへ荒波が打ち寄せる様子が、まるで龍が舞い上がるように例えられている。



岩井崎（潮吹き岩） 気仙沼市

気仙沼湾の入り口に位置する「岩井崎」。岬の先端にある「潮吹き岩」は、長い年月をかけて石灰岩を侵食した海食洞の縦穴から、潮を吹き上げる光景が見られる。江戸時代には、仙台藩御塩場として製塩が盛んに行われた場所で、現在も塩づくりを体験できる。



■ 神割崎 南三陸町／石巻市

神様が崖を二つに割ったという伝説が名前の由来となっている。

例年2月中旬と10月下旬には、ちょうど岩の間から朝日が昇り、幻想的な光景が広がる。岩場にはニッコウキスゲやハマギクなどが多くみられ、周辺には松林に囲まれた遊歩道があり、森林浴をしながら海岸風景を楽しむことができる。



■ 田束山 気仙沼市／南三陸町

気仙沼市と南三陸町にまたがる「田束山」。古くから山岳信仰の霊山として人々の信仰を集め、奥州藤原氏との深いゆかりをもつと言われている。山頂付近は、太平洋が一望できる沿岸屈指のビュースポットで、5月上旬には、山頂一帯のツツジが燃えるような朱色に色付き始める。



■ 出島／出島架橋 女川町

出島は、宮城県女川町の沖合に浮かぶ島。黒潮の海に囲まれた島内は本土に比べて暖かく、植物や昆虫、野鳥の多い豊かな自然を楽しむことができ、島内には民宿もあり、観光客の方は釣りなどの体験ができる。

2024年12月には本土と出島をつなぐ出島架橋が開通予定である。



■ 金華山 石巻市

牡鹿半島沖に浮かぶ島「金華山」。恐山、出羽三山とともに東奥三大霊場に数えられており、手つかずの自然が多く残されている。金華山に生息するニホンジカは、神の使い（神鹿）として大切にされていて、シカが発情期をむかえる毎年10月初旬には鹿の角切りの神事が行われる。



■ 津山地区 登米市

三陸復興国立公園としては珍しい、海に接していない内陸部の地域。

モミヤカヤなどの自然林と横山不動尊や柳津虚空蔵尊などの神社仏閣が織りなす景色を楽しむことができる。

横山不動尊の境内の池には、不動尊の「御使姫」であるウグイが生息しており、国の天然記念物に指定されている。

3. 未来にむけて

3-1. 公園関係者からのメッセージ

3-2. 関係市町村長メッセージ

3-3. 子どもたちからのメッセージ



公園関係者からのメッセージ

種差海岸のすばらしさと
保全活動北奥羽自然史研究所
高橋 晃

1954年 青森県八戸市白銀町生まれ 69歳
1977年 弘前大学教育学部卒業
青森県立浪岡高等学校教諭採用
2014年 上皇上皇后両陛下が種差海岸を訪問された際、
案内役を務める
2016年 北奥羽自然史研究所設立
2016年 環境省自然環境局長表彰(自然歩道関係功労者)
2019年 環境大臣表彰

役職等
国土交通省河川水辺の国勢調査アドバイザー
八戸市文化財審議委員
北奥羽自然史研究所 所長

主な執筆
2005年:新編八戸市史別編自然編監修 一部執筆
2012年:新編八戸市史地誌編一部執筆
2016年:北奥羽里山を歩くデリー東北新聞社

はじめに

種差海岸が三陸復興国立公園に編入され、種差海岸インフォメーションセンターなどの設備や、みちのく潮風トレイルや三陸ジオパークと合わせた色々なイベントなどが充実した。利用者も、平日や小グループが増えてきていて、喜ばしいと思っている。

種差海岸のこれまで

国立公園編入が決まったとき、地元新聞に「80年の悲願」という言葉が踊った。1931(昭和6)年の国立公園法制定の後、十和田国立公園(現在の十和田八幡平国立公園)に種差海岸を含めようという運動が起こったものの叶わず、代わって国の名勝に指定されたが、地域は編入希望を失っていたいなかったからだ。(余間だが、かつて八戸市の海の景勝地といえば白銀海岸「扇ヶ浦」であった。



扇ヶ浦は、二代目八戸市長の「神田構想」で八戸港に修築され¹⁾、現在の八戸市の繁栄につながっている。

2007(平成19)年に国立公園の見直し(環境省による国立・国定公園総点検事業)が始まり、が、2011(平成23)年に三陸復興国立公園となった。公園に指定されたとのニュースを聞き、私はまた「三陸」と津波の因縁かと思った。三陸は明治初期の造語で、1896(明治29)年の明治三陸大津波で一般化したとされるからだ。80年の悲願はともかく、人的被害の少なかった北から盛り上げていこう、という気持ちがわき、多くの人たちと共有できたと感じている。

種差海岸は、明治の作家大町桂月が物見岩に登り、「草ばかりの広く長き岡」と驚いた八戸藩の「妙野牧」の一部であった。牛馬放牧以前、台地上はコナラとブナ、海岸沿いはカシワの林が広がっていた。その森林は、製鉄や製塩のために伐採された。旧八戸藩領は砂鉄が豊富で、製鉄が盛んであった。安価な鉄で大鍋をつくり、海水を直接加熱する直煮(じきに)をした。伐採後は火入れや馬の放牧で、広大な草原になった。放牧は、焼き畑と共に、数十年サイクルの営農システムにも組み込まれていた²⁾。階上町の大草里窪の地名にその名残がある。

放牧と初夏の冷涼な東風ヤマセと、冬の小雪によって人里の草原と呼べる特殊な植物群落が成立し、長い間維持



写真1
通称ミイシの景観

されてきた。特に沿岸部の海成段丘崖から波打ち際までは、季節ごとに段丘上部から供給される水分量が変化し、多様な地形に応じた植物群落が発達してきた。加えて、初夏にノハナショウブやニコウキスゲなど湿性植物が咲く場所に、秋には乾燥してススキ野となりオミナエシやシラヤマギクが咲く。鮫角灯台下の通称ミイシには名勝指定当時の植物景観が残っている。(写真1)

自然を理解するうえで大切なことは、自然の基礎は植物群落であり、美しい花もその一員にすぎないという見方だ。植物の花は、マルハナバチなどの花粉送者を呼びよせるために咲かせる。植物群落を、周囲の植物や花粉を運ぶ虫、根の周りの菌類、土壌生物も含め、複雑な関連性と構造とをもつ生命体として見る必要がある。植物群落あるいは植生は、保全を考えるうえで欠かせない概念だが、まだ広く理解されているとは思えない。

種差地域における植生の記録は、1978(昭和53)年の第2回自然環境保全基礎調査で、「鮫海崖植物群落」が特定植物群落に指定された³⁾のが始まりであった。これは学術上重要あるいは保護を必要とする植物群落の生育地および生育状況について調査したもので、全国で3,833件が報告された。私は当

時の勤務校の関係で、白神山地や岩木山などを担当していたが、種差海岸の報告は複数の群落を一括して扱っていて、問題を感じていた。その後、2005(平成17)年に新編八戸市史別編自然編⁴⁾に種差の植生の詳細な説明を掲載できたが、生物多様性については詳しく記述できていなかった。

私は種差の自然を語るとき、松花堂弁当にたとえている。小さな区切りがそれぞれ異なった彩りと深い味わいをもっているが、季節のテーマが隠されていたり、板前との勝負という面もある。

自然の豊かさの指標に「生物多様性」がある。生物多様性には3段階があり、生態系の多様性、種の多様性、遺伝子の多様性があり、さらにジオの多様性が増えられる。

その4段階を具体的にみてみよう。遊歩道沿いでも乾性草原や湿性草原、塩沼湿地、岩壁、砂浜、森林など異なった植生が発達していて、生態系の多様性を見ることができる。また、約650種を数える植物が生育し、北限種ハマギクや南限種エゾノシシウド、海拔0mの高山植物マルバダケブキのほか、多くの絶滅危惧種を含み高い種の多様性を見ることができる。また、北上山地特産種ナンブトウヒレンは、種差海岸の環境に適応し特産種のハチノヘトウ

ヒレン（写真2）となった。シラヤマギクは強い潮風に適応して草丈が低くなっている。これらは遺伝子の多様性と見るができる。これらの基盤となっている様々な地形・地質はジオの多様性である。

松花堂弁当のたとえば、JR 八戸線と海岸線に挟まれた狭い範囲に、小さく区切られたモザイク状に植生があることを意味する。ニッコウキスゲが咲く草原も均一ではなく、性質の異なる植物群落が組み合わされている。植物群落は遊歩道や踏み込みで分断されると縮小し、消失あるいは別の植物群落や外来植物などに置き換わってしまう。種差海岸の生物多様性も危ういバランスの上に成り立っている。

種差海岸は、市の中心部から自動車ですら30分程の所で生物多様性の4段階を見ることができる世界で数少ない場所の一つといえる。

保全活動について

すばらしい自然を守ろうという八戸市民の高い意識と行動も種差海岸の魅力である。現在につながる保全活動は1987（昭和62）年のプレイピア白浜駐車場無届け造成問題からはじまったと考えている。これによってかつて松林沼と呼ばれ、サワギキョウが咲く湿

原が破壊されたが、原状復帰はされていない。その後「道の碑」問題もあり、いくつかの自然保護団体が活動をはじめた。

保全活動で問題になる「望ましい景観」は、「名勝指定当時の植物景観」であり、ジオパークのように名勝に再認定審査があるならば、指定を返上しなければならないのが現状だと考える。指定当時の景観は、先人の残した記録と植物生態学的な解析から再生が可能である。

どのように維持していくかは、放牧と人の暮らしが与えた影響をできるだけ再現することだ。2008年の保存管理計画運用指針⁴⁾にあるように、クロマツの間伐や林床の刈り払い、天然シバ地の草刈りがそれにあたる。加えて「自然に一切手を触れない」時期に放置され、遷移が進行した群落と、その間に失われた植物、逆に侵入してきた外来植物の問題がある。

クロマツは、在来の植生への影響に加え、台風等による倒木も増えている。北奥羽の天然マツはアカマツである。クロマツ林は外来植物で、大正期の深久保青年団の植樹や白浜集落による大須賀海岸砂防造林事業、周辺のクロマツ植栽林から飛来した種子に由来したものである。つがる市車力町屏風山や

秋田県能代市の風の松原など、日本海側では江戸期から血のにじむような努力をして防風林をつくってきたが、太平洋岸ではそれほど苦労しなかったが、淀の松原で、世代の天然更新は見られない。大須賀海岸で汀線に平行して带状に土手のようにあった若いクロマツ林は、東日本大震災の津波の2年後から衰えてなくなった。これは根に共生する菌根菌の衰退が原因と考

えている。

クロマツの実生からの芽生えや幼樹の引き抜きは、各自然保護団体によって長く続いている。成木は八戸市森林組合による間伐が進められ、大幅に減少してきた。伐採跡に絶滅危惧種のミチノクヤマタバコやサクラソウも一部再生した。2017年には、伐採木の馬による運搬を試み、春には以前の植生が一部再生した。（写真3）この組合の取り組みには、環境への負荷軽減や経済面で多くの工夫があり、他の地域でも参考になるだろう。

しかし、クロマツ管理の最大の敵は、白砂青松の海岸景観を求める人々の意識だと考えている。

蕨島も2022年、国の天然記念物「蕨島ウミネコ繁殖地」として指定100周年を迎えた。これを機に八戸市は、詳細な調査を2年間実施し、2024年度の保存活用計画策定を目指している。

2013年の岩手大学の山本教授ら⁵⁾の社会学的考察で、市民と行政の協働による活動がよく機能している数少ない例と紹介されていた。しかし国立公園編入後、同大学の2020年の吉川ら⁶⁾は「保護制度の変化に対してそのまま再接続することはできなかった」としている。これを素直に受け入れることはできないが、関係者は一読して参考



写真3 伐採木の馬搬

にして欲しい。

これからに向けて

今後、「生物多様性の3段階が見られる」という点を種差海岸の新たな魅力として利用したいところだ。生物多様性をテーマとした野外での観察や実習は難しいが、種差海岸でなら可能だ。企業研修や学校の学習に対応でき、SDGsの学習にも利用可能だと感じている。

また、緊急に、現在の種差海岸の自然環境の状態を学術調査により把握し、標本とDNAなどの資料を集め保管するアーカイブを作りたい。種差海岸でも気候変動の影響が始めていると感じているが、これまでの気候変動は数万年単位のもので、数十年単位で起こる変化は予測不能だ。自然の変化はドミノ倒しの様に始まってもおかしくない。

- (1) 中里進（1980）神田重雄傳，東奥日報社
- (2) 有蘭正一郎（1982）近世農書にみる東北地方北部の耕作法の地域的性格，人文地理第34巻第2号，人文地理学会
- 環境庁（1979）特定植物群落調査報告書 青森県 - 第2回自然環境保全基礎調査・環境庁委託・青森県
- (3) 八戸市史編纂委員会編新編（2005）八戸市史別編自然編，八戸市
- (4) 八戸市教育委員会編（2008）名勝種差海岸保存管理計画運用指針，八戸市教育委員会
- (5) 宮内泰介編（2013）なぜ環境保全はうまくいかないのか，新泉社
- (6) 吉川紀愛・山本信次・高田乃倫予（2020）国立公園化による地域環境がバランスの変遷，岩手大学農学部演習林報告51号



写真2 種差海岸固有種ハチノヘトウヒレン

公園関係者からのメッセージ

これからも、 うみねこ丸とともに

岩手県北自動車株式会社
宮古遊覧船事業部 金澤 明美



岩手県下閉伊郡田野畑村出身。
1976(昭和51)年4月～1984(昭和59)年3月
岩手県北自動車株式会社の盛岡営業所でバスガイド。結婚を機に退社。

1985(昭和60)年～1988(昭和63)年頃
田野畑村産業開発公社にて、北山崎の遊覧船に乗船して
マリンガイド。その後子育てに専念。

1997(平成9)年～2021(令和3)年1月
岩手県北自動車株式会社宮古遊覧船事業部にて、陸中丸
に乗船してガイド。

2022(令和4)年7月～
うみねこ丸の就航と同時にガイド再開。

「宮古うみねこ丸」をご存じだろうか？2022(令和4)年7月に就航した遊覧船である。私はこのうみねこ丸に乗船してガイドをしている。うみねこ丸は宮古港の出崎埠頭から出港し、浄土ヶ浜、ローソク岩などを眺めながら海上を周遊している。「浄土ヶ浜エターナルグリーン」と呼ばれる海の色(実際にどのような色なのかは、是非乗船して確かめていただきたい。)などなど、とても美しい景色を楽しむことができる。浄土ヶ浜周辺は、三陸復興国立公園に指定されており、自然公園法による規制が最も強いところもある。素晴らしい自然が守られ、残っているということだと思う。

今年(2023(令和5)年)が、三陸復興国立公園が2013(平成25)年5月に指定されてから10周年という節目の年であり、環境省が記念誌を作成するという。公園関係者としてメッセージを寄せて欲しいとの依頼があった。ガイドという、どちらかというと自然を利用する立場の関係者として、この

場をお借りして、これまでのガイド人生を振り返り、これからの思いについても書いてみたいと思う。

略歴にもあるように、ガイド人生は、バスガイドから始まった。仕事・就職をどうしようかと悩んでいた時、高校の担任の先生から、(引込み思案で内気だったが)バスガイドをやってみたらどうかと言われたのがきっかけだったように思う。当時はバスガイドを目指す人が結構いて、入社試験があり、その中には歌もあった。浄土ヶ浜を知ったのは盛岡ー宮古間でのバスガイドになってからだったと思う。ちなみに当時から陸中海岸国立公園(三陸復興国立公園となる前の名称)のことは解説していた。

無事に就職できてからは、ガイド一筋。初めての海の上でのガイドは、北山崎の遊覧船の乗員として、だった。1997(平成9)年から、うみねこ丸の前身の第16陸中丸に乗船してガイドをしていた。第16陸中丸の乗客定員は約400人で、乗客定員80人のうみねこ丸より大きかった。当時は操舵室から客室に声を届けるかたちでガイドをしていた。

大きな転機の一つは、2011(平成23)年3月11日の東日本大震災。その日は休みで自宅にいた。東日本大震災に関する

詳細はここでは割愛するが、思い返すと公私ともに大変だった記憶が蘇ってくる。当時、3隻あった遊覧船のうち、震災で2隻が被災。1隻が残った。それが第16陸中丸。震災直後、船長がとっさの機転を利かせて沖合に出た。3日間沖にいて、津波の警報が注意報になってから戻ってきた。残りの2隻は、津波で打ち上げられて廃船となってしまった。

遊覧船は震災の4ヶ月後に再開したが、4ヶ月では仮設住宅ができたあたり。まだ避難所、体育館での生活を強いられている人もたくさんいた。また、堤防が決壊したままだったり、道路が切れていたり、爪痕がまだ生々しく残るところが見えていたので、本当にガイドして良いのか、という思いもあった。再開初日は、船上でガイドをしていて涙が出てきた。泣きながらガイドをする私を見たお客さんが泣いて、また私が泣いて、の繰り返しだった。楽しかった、と言ってくれるお客さんがいた。その言葉をいただいてまた頑張ろうという気になった。ボランティアはできないけれど、宮古に来た人たちにお金を使っていただくことによる貢献が少しでもできればと考えた。宮古が元気になるように。少ししてから地元の方、被災した方も来てくれるようになった。大変だったね、とお互いに声を掛け合い、励まし合った。震災後は、操舵室から出て、お客さんと客室で直接コミュニケーションを取りながらガイドをするようになった。暗い顔をしてガイドはできない。明るく努めた。

第16陸中丸による遊覧船事業が終了となったのは、2021(令和3)年1月。びっくりしたのと、お客さんとの対話ができなくなるのが寂しかったし、悲しかった。船は製造から30年以上が経過し、老朽化して、船の代替えだけで何十億レベルというお金が必要だった



うみねこ丸

という。船体が大きい(第16陸中丸は109トン、うみねこ丸は19トン)と、乗組員もたくさん必要で、経費もかかる。以前はバスを連ねた団体旅行がたくさんあったが、だんだんそういう時代ではなくなり、旅行形態も変化していた。赤字運航常態化により、会社の判断で事業を終了することとなった。しかし、たくさんの方々から浄土ヶ浜の観光に遊覧船は欠かせない、という声が寄せられ、宮古市が新たに遊覧船を建造することとなった。その運営者の公募があり、弊社が応募し、採用されるに至った。

新型コロナウイルスの蔓延も経て、うみねこ丸が就航したのが、2022(令和4)年7月。うみねこ丸が始まる、となって、幹部から声がかかり、ガイドについて打診があった。頑張ります(やります)、と答えた。ただ、震災や第16陸中丸の事業終了を経て、コースも変わって(第16陸中丸の時は出崎埠頭がなかった)、何をしゃべろうか、ちゃんと案内できるか、不安だらけだった。一方で、第16陸中丸は大きな船だったので浄土ヶ浜の中には入れなかったが、うみねこ丸は第16陸中丸に比べると小型で浜が見えるところまで行けるし、小回りがきく。これまでと違う新しいガイドができるのではないか、という気持ちもあった。

うみねこ丸でのガイド内容のベースには、第16陸中丸時代のものがある。ガイドの原稿もあるが、特に伺いを立ててアレンジしていることはなく、どのようなことを話すかは基本的に任せられている（この自由は会社からの信頼に基づくものと思っている。）。第16陸中丸と異なるのは、陸中丸の時は観光に来られたお客さん目線に特化していたが、うみねこ丸では地域のことに触れながらガイドをしている点だ。例えば、海を行き交う漁船について。イカ釣り船や、底引き網漁をするトロール船などが通れば、そのことも紹介している。宮古では、午前7時と午後2時に2回、宮古市魚市場で競りがある。午前7時の競りには定置網をする漁船や個人の漁師、午後2時の競りにはトロール船が間に合うように帰ってくる。このことを観光客はまずわからない（地元の方もよほど興味がなければわからないだろう）ので、加えてその日の魚の入荷情報も仕入れてお話ししている。トロール船が帰ってくるときは、10隻が順番に帰ってくるのが水平線から見える。いっぱいおとれていればその重みで船が沈んでいるのがわかる。自分が見たことのない船が見えることもある。あれは何でしょうね、とお客さんと一緒に見ることもある。そのほか、うみねこ丸は宮古市の船でもあるので、宮古市の地域情報、例えば宮古港海戦のことや、先日、日本ジオパークに再認定された三陸ジオパークに関すること、それから三陸復興国立公園のことなど、随時、新しいものを加えながら解説をしている。単に目に見えることだけでなく、例えば陸奥、陸中、陸前、が合わさって三陸であることや、宮古から北が海成段丘で南がリアスであることなどをお伝えすれば、理解に深みが生まれると思う。

うみねこ丸は船体が安定していて、



うみねこ丸でのガイド

お客さんを案内している時は酔わない。お客さんも酔うことはめったにない。運航基準を下回る波の高さでも少し揺れることはあるが、お客さんの様子を見ながら、そばに寄り添いながら案内するようにしている。

拍子抜けするかもしれないが、一番思い入れのある景色は、これ、というのは浮かんでこない。水平線と美しい見所が全体として調和して見えるところが良いな、と思う。そのような素晴らしい景色を案内する際に、ここがジオパークでもあるし、国立公園でもあるし、というのを伝えている。どうやって石ができたのか、できるだけわかりやすく砕きながら、誰でもわかるように説明するようにしている。浄土ヶ浜は、なぜ砂浜ではないのか。マグマからできた石はとても硬い。とても硬いので、波で擦れあっても砂にはならない。

発着地に戻る際、「喜びも悲しみも幾歳月」という曲を歌っている。同名の映画のゆかりの地が、重茂半島の鉾ヶ崎灯台。台長の奥さんが出した手記が婦人雑誌で取り上げられたことがきっかけで映画になった。1957（昭和32）年に映画が上映され、大ヒット作となった。その映画の主題歌。バスガイドの時に習った歌で、震災前は何かのイベントの時に歌うくらいだったが、震災後、船上で歌うようになった。みんなに少しでも元気になってもらえるように、という思いを込めている。

今後の課題としては、うみねこ丸だけのものではないが、冬の時期に三陸にどうやってお客さんと呼び込もうか（そしてうみねこ丸に乗船してもらうか）、という点がある。冬は冬で海の景色も違うし、食はむしろ冬の方が美味しくかったりもする。景色が堪能できるおすすめの時期は冬。空気が澄んで重茂半島ははっきり見えるし、海の青さ、空の青さが鮮やか。気温が上がると、遠くが霞がかかることがある。とはいえ三陸には温泉がなく、オンとオフのメリハリがありすぎる。冬のうみねこ丸はおすすめだが、景色を堪能できる2階デッキは冬は寒い。冬の間どうやって誘客を進めていくか。三陸復興国立公園でも始まった満喫プロジェクト始め国の事業にも積極的に関わったり、モニターツアーを実施していったりしていくと良いのではないかと考えている。ジオパークにしても国立公園にしても、行政が頑張っている。一緒に連携していけたら良いのではないかと考えている。

個人的な課題としては、ガイドがマンネリ化しないような工夫が必要と考えている。現在1曲の持ち歌を増やす必要があるかもしれない（しかしこの曲は不変の方が良いのかもしれない。）。最近のできごとを含めこれまでにない新しい情報を加えることも必要。宮古で本格化しているトラウトサーモンの養殖生け簀も遠くに見える。

これまでのガイドで辛かったことはいっぱいある。例えば、陸中丸の時、お盆の時期は臨時便が出るほど盛況で、ご飯を食べる時間が10分しかなかったり。でもやりがいはあった。お客さんとのやりとりが楽しく、この仕事が、海が好きなのだと思う。お世話になっている方々（お客さん、会社）に少しでも恩返しをしたい。お客さんへの感謝の気持ち、仕事をさせていただいて



第16陸中丸の最後の日(2021(令和3)年1月11日)

いることへの感謝の気持ちを忘れたことはない。

お客さんに怒られることもある。看板がなくて発着所までの道がわからなかった、と言われたこともあった。お気持ちは理解できたが、そこが国立公園園内であれば、景観保護のためならある程度の不便は仕方がないのではないかと、とも思う。浄土ヶ浜をライトアップすればきれいに見えるし、賽の河原の子安地蔵のお堂を見えやすくするには木を伐採すれば良いのだが、そこに棲む生き物たちにとってはどうなのかについても思いを巡らす必要がある。ルールの範囲内で、魅力ある紹介ができれば良いのではないかと。両立が大事だと考えている。

震災の伝承もしていきたいし、ジオパークや国立公園についても伝えていきたい。津波の恐ろしさや自然の美しさ・たくましさ。浄土ヶ浜の棧橋の近くで、津波で打ち上げられた赤い浮き球を残して震災について伝えている。ここでそれを見た方々が、これからの未来で万が一震災に遭った時、自分たちの命を救うことにつながると信じている。そして、なんと言っても、うみねこ丸から見える数々の素晴らしい景色を、是非楽しんでいただきたい。

これからもうみねこ丸とともに、元氣にご案内している。是非お越しいただきたい。

公園関係者からのメッセージ

三陸復興国立公園
10 周年によせて唐桑観光ガイドの会
会長 戸羽 芳文

昭和28(1953)年	宮城県気仙沼市唐桑町生まれ
昭和58年～平成18年	唐桑町議会議員
平成18年～平成24年	気仙沼市議会議員
平成27年	唐桑観光ガイドの会設立
平成30年～	唐桑観光ガイドの会会長



唐桑半島／巨釜半造・水取場

町の将来を見据えた時に基幹産業の漁業に加え、観光をもう一つの柱とするという明確な方向性が定められた時期だったと思う。

その後、日本はバブル経済に浮かれそして忽ち弾け、憂き目を味わいつつ失われた20年に向かう。高度経済成長から低成長時代に入り、巨大資本によるテーマパークの戦略や海外旅行への旅行者ニーズの変化等により、唐桑半島への観光客の入込みは年々減少の一途を辿るようになった。既定の路線で「夢もう一度」を願っても叶わない現実を直視し、抜本的な戦略変更が求められた。そのような中、2006（平成18）年4月に唐桑町は気仙沼市と対等合併に踏み切り、新たな地域づくりが始まった。

視点を広げ全国に目をやれば、都会から遠く離れた片田舎にも、その町でしか味わえないものを求めて観光客が

家族や小グループで足を運ぶという事例を参考に、唐桑も体験型観光に取り組もうという機運が盛り上がってきた。当時の唐桑観光協会吾妻会長と小松事務局長のリーダーシップのもと、岩手県田野畑村をはじめとする先進地を視察し、確かな手応えを感じ取っていた。そして、いよいよ体験観光へ舵を切ろうとしていた矢先に思いもよらぬ事態が発生した。

2 人生観を変えた東日本大震災

○積み重ねてきたものが全て失われた

2011年3月11日東日本大震災が発生し、東北地方の太平洋岸は壊滅的な被害を受けた。当日、私は気仙沼市議会定例会予算審議の最中、3階の会議室が崩れ落ちるのではないかと思われるほどの強震に見舞われた。その1時間後には気仙沼港の内湾に巨大津波が

念ながら一般の観光客が足を向けることは少なかったようだ。国立公園としてのあるべき姿と現実的な観光客ニーズには大きな隔たりがあったようにも思われる。

1984（昭和59）年には気仙沼市大島をメイン会場に唐桑半島御崎地区をサブ会場として全国自然公園大会が開催され、これに併せ宮城県は国民宿舎の隣接地に唐桑半島ビジターセンターをオープンさせた。数年前に着工した御崎観光港が暫定開港し大会当日は大島の長崎漁港と旅客船が繋がった。その前年から唐桑町議会議員として活動を始めていた私にとっては、自分の住む崎浜地域にこのような観光拠点が整備されることがとても嬉しく誇りに思えた。自然公園大会には皇族も行幸されるとあって数年前から交通ルートの整備が進み半島先端部に至る県道の改修も大幅に進展した。

この機運に乗じて御崎地区でも民間活力結集による観光事業への取り組みが検討され私もそのメンバーに加わった。巨釜半造エリアにおいてはかねてより民間事業者による観光売店が運営され好成績をあげていた。その成功事例に学び、御崎地区としては御崎神社の境内の一角をお借りし民間有志による観光売店の営業をスタートさせた。

1 はじめに

○国立公園の歴史と共に歩んできた人生

唐桑半島が気仙沼市の大島や岩井崎とともに陸中海岸国立公園に編入されたのが1964（昭和39）年、私が小学校6年生の時だった。私たちの住む唐桑は三方を海に囲まれ、リアス海岸の景勝地が連なる素晴らしい土地柄だということは子供心にも理解していた。そんな唐桑が晴れて国立公園に指定されるというニュースが伝わった時には、明るい未来が拓けるような夢と希望が湧き出るような気持ちになったことを今でも覚えている。

私が中学生の頃には半島の先端部の御崎地区に国民宿舎からくわ荘が町営施設としてオープンし、その隣接地には県営の野営場も開設され、御崎地区は折石のある巨釜半造エリアとともに観光客を呼び込む拠点としての整備が進んだ。時あたかも高度経済成長の始まりで、大型バスに乗った観光客が団体で押し寄せ、その受入れに対応すべく民宿の数も次第に増えていった。

自然公園の理念に則り、リアス海岸の眺望を楽しめる東海岸には自然探訪歩道が整備されたが、海がよく見えるように断崖絶壁に近いルート設定だったことからアップダウンも厳しく、残

到達し、筆舌に尽くしがたい地獄絵を見ることになる。

その晩はどこにも動くことができず市役所に留まり、唐桑に帰れたのは翌日の昼過ぎだった。地域の人たちの安否確認やインフラの状況など、様々なことが気になった。唐桑の観光資源はリアス海岸が形成する造形美にあり、元々台風や強風にさらされる場所に位置していることから、殆どの景勝地は影響を免れた。ただ一つだけ唐桑の観光のシンボルである『折石』のことが気になっていた。なぜならば高さ16mの大理石柱は1896（明治29）年の三陸大津波の際に先端部が2mほど欠けてしまい、以来『折石』と呼ばれていたからだ。

震災から数日後この場所を確認しに行ってみたら、折石は何事もなかったようにいつもの雄姿を見せていた。私は思わず両手を合わせてありがとうと

つぶやいた。私もこの巨石に倣い、復興に向けた苦難の道のりを心折れることなく歩み続けようと心に誓った瞬間だった。

震災から1年後、市の復興計画は策定されたもののあまりの被害の大きさにがれきの撤去さえままならない状況にあった。合併から5年、新市建設計画10年の中間地点に起きた大災害に既定の事業はストップし、復興事業を優先せざるを得ない事態となった。自分が描いていたまちづくりビジョンを予定通り進展させることのできない悔しさ、怒りで心の中はいっぱいだった。残された3年間の任期を復興事業進展に費やし、私の地方議員としての活動を終えた。

2014年春、地元崎浜自治会の会長に就任し、私の新たな活動が始まった。合併以来2期8年間、広い市域を駆けずりまわり動いてきた私にとって、生

まれ育った唐桑にどっしりと腰を下ろし活動できることはとても大きなやりがいを感じるものだった。

崎浜地区の特徴は、地区内に国立公園特別区域を有し、国民宿舎やビジターセンターなど観光施設が張り付いていること。私は自治会活動とこれら観光施設との連携こそが活力のある地域づくりに繋がると信じ、地域貢献の活動をスタートさせた。

3 新たなあゆみ

○三陸復興国立公園として生まれ変わる

ビジターセンターには小松事務局長が嘱託待遇にも関わらず殆ど毎日勤務し、施設の再開を目指し活動していた。津波で亡くなられた吾妻会長の後任として三上新会長が就任し、唐桑観光協会の活動が再開された。

環境省は創造的復興の一環として青森県から福島県までの太平洋沿岸にみちのく潮風トレイルというロングトレイルを設定する構想を打ち出し、これまでの「陸中海岸国立公園」を指定エリアの拡大とともに「三陸復興国立公園」として生まれ変わらせる方針を発表した。

このことは大災害で打ちひしがれた我々被災者をどれほど勇気づけてくれたかしのれない。名称変更は単なる看板の付け替えに止まらず、創造的復興に相応しい支援策を伴わせた。時を置かずして唐桑地域は環境省のエコツーリズム事業のモデル地区に指定され、インストラクター養成などを柱とする4年間にわたる体験観光の素地作りがなされ、私もその仲間に加わった。

これと連動し宮城県と気仙沼市は唐桑半島に宮城オルレ気仙沼・唐桑コースを設置し、2018年に開通させた。エコツーリズム事業によるインストラクター養成研修を受けた私たち認定ガイドがこのコースを案内することになり、

このような新たな観光ニーズに対応すべく「唐桑観光ガイドの会」が誕生する運びとなった。

みちのく潮風トレイルにしても宮城オルレにしてもそのインフォメーションを担う窓口が必要であり、唐桑半島ビジターセンターがその役割を適確に果たしていった。全国各地から支援に訪れた人たちは必ずビジターセンターに立ち寄り、震災後にリニューアルされた津波体験館の映像で災害時の様子を確認していった。桜プロジェクトの団体も唐桑の各所に多くの苗木を植えてくれた。ビジターセンターに隣接する広場には静岡からの支援により河津桜が植樹され、春には柔らかなピンク色の花を咲かせ私たちの心を和ませてくれる。

4 唐桑観光ガイドの会

○復興の道を歩み続ける決意

東日本大震災の被災地において、復興の段階で観光ガイドの組織が結成されたという事例は少ないのではないかと。個人としてのガイドはいたとしてもまとまった人数で統一した活動を行う団体は稀だと思ふ。まさに唐桑の底力であり、環境省が実施したエコツーリズム推進事業による成果と言えるだろう。

ガイドの会は観光ガイドの傍ら、遊歩道の整備を請け負い草刈りや枝払いにも汗を流している。常日頃より自分たちがガイドするコースを点検しておくことにより安全安心な観光ガイドに繋がると思うからだ。

会がスタートして数年後のコロナ禍の時期には、環境省による国立公園への誘客推進事業の認定を受け、観光地の草刈りや枝払いの作業を念入りに実施できた。共同募金会の助成により購入していた木材を砕く機械を利用して倒木をウッドチップにし、遊歩道に敷き詰める活動も行った。コロナ明けに



唐桑半島／巨釜半道・折石



唐桑観光ガイドの会集合写真

必要欠くべからざるものだった。この施設は現在リニューアルのため2年間にわたり閉鎖されており、2024年春の再開を心待ちにしているところだ。

陸中海岸国立公園の歴史と共に成長し、喜びも悲しみも幾星霜。この地に根差しながら活動してきた自分にとって、やはり故郷の景色や景観その風土から多くのエネルギーを授かって生きてこれたのだなと実感する今

日この頃である。

近頃、唐桑観光ガイドの会の活動を通じ『歩は金なり』というテーマがふと浮かんできた。歩くことにより得られる達成感や満足感、その価値は無限だ。自然公園の雄大な景観を眺めながら、一步一步大地を踏みしめ、歩くことの幸せを実感し続けたい私は思っている。

三陸復興国立公園が誕生して10年、色々な出来事が次々と興り、目まぐるしく経過したというのが率直な感想である。しかしながら、その中で多くの事を学び、多くの土台を築き、多くの糧を得た10年だったと思う。ハード面については殆ど達成できたとしても、ソフト面における復興はまだまだ途は長いと思っている。ビジターセンターのリニューアル再開に併せ、唐桑が持つ多くの観光資源を活かしつつ復興の道を歩み続けることを仲間と一緒に誓い合いたいと思う。私の気持ちの中に積み上げてきた故郷への誇りと愛着心を胸に秘めながら。

はトレッキングに訪れた方々に気持ちよくコースを歩いてもらいたいと思ったからだ。

気仙沼市が提案した東日本大震災10年記念事業の認定を受け実施した「復興の道を歩み続けるプロジェクト」では、日本遺産「みちのくGOLD浪漫」と連携し、唐桑町内に「みちのくGOLD浪漫探訪ルート」3コースを設定した。この事業により会独自の唐桑半島ガイドマップも作成することができた。みちのく潮風トレイルや宮城オルレ気仙沼・唐桑コースは片道ルートなので、スタート地点に戻る際のアクセスに難儀していることから、GOLD浪漫コースは周遊ルートに設定し利便性を高めている。

また、観光協会とタイアップして取り組んできた「唐桑おさんけウォーク」は本会として最大のヒット商品になった。唐桑には多くの産土神が点在し、祈りの文化が根付いている。春先に行われる地域の年中行事にあやかつて企画した「おさんけウォーク」は実施するたびにコースが変化することから、リピーター客が毎回参加するようになった。

唐桑半島ビジターセンターは、私たちがガイド活動を行う際の拠点として

三陸復興国立公園フォトスナップ



燕島とウミネコ(八戸市)



浄土ヶ浜(宮古市)



御番所公園から望む金華山(石巻市)

八戸市長 熊谷 雄一



三陸復興国立公園指定10周年を祝して

三陸復興国立公園が2023（令和5）年5月24日に指定10周年を迎え、ここに記念誌が発刊されることは大きな喜びであり、心から祝意を表したい。

東日本大震災により被災した三陸地域の復興に貢献するため、種差海岸階上岳県立自然公園を陸中海岸国立公園に編入し、自然の恵みと脅威を学ぶ場として、青森県、岩手県、宮城県の3県にまたがる三陸復興国立公園は創設された。その意義を改めて考え、三陸沿岸地域の更なる復興と地域振興に決意を新たにしたところである。

当市における種差海岸の国立公園指定までの道のりは、決して平坦なものではなく、十和田湖と同じく国立公園指定を目指した昭和初期まで遡る。市民にとっては80年来の悲願であり、たゆまぬ努力と情熱を傾けた先人、種差海岸の自然を大切に守ってこられた郷土を愛する全ての人々に敬意を表したい。

八戸市は、太平洋を望む青森県の南東部に位置する、人口約22万人の中核市であり、全国有数の水揚げ量を誇る



大須賀



茸毛崎展望台

水産都市として、さらには北東北最大級の工業都市として発展を遂げてきた。東北新幹線八戸駅、東北縦貫自動車道、八戸港フェリーターミナル、また、近隣には三沢空港が整備されており、北東北における陸・海・空の交通結節点である。

市街地からほど近い場所には、三陸復興国立公園である蕪島や種差海岸の風光明媚な自然景観が広がるほか、世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」の一つである是川石器時代遺跡、ユネスコ無形文化遺産で日本一の山車祭りである「八戸三社大祭」や国指定重要無形民俗文化財の「八戸えんぶり」、毎週日曜に開かれる国内最大級の朝市「館鼻岸壁朝市」、昭和の風情漂う横丁等、魅力ある観光資源を有している。

種差海岸は、陸中海岸北部から続く海成段丘の北端に位置し、その海岸線は、荒々しい岩礁地帯と穏やかで美しい砂浜、かつて馬の放牧地だったことに



種差海岸のニッコウキスゲ

より維持されてきた天然芝生等、変化に富んだ海岸風景を見せ、「ヤマセ」と呼ばれる太平洋から吹き付ける冷たい風の影響により、650種を超える海浜植物と高山植物が咲き誇り、その印象的な光景は「花の渚」とも呼ばれている。

最北にある蕪島は、ウミネコの一大繁殖地として国の天然記念物に指定されており、繁殖の様子を間近で観察することができる国内唯一の場所で、その数は3～4万羽にのぼり、島がウミネコに覆いつくされるほどである。

多彩な景観を誇る種差海岸は、訪れた多くの文化人を魅了し、数々の作品の中で賞賛されている。全国の鳥瞰図を制作し、「大正の広重」と称された吉田初三郎は種差天然芝生地近くにアトリエを構え創作活動を行った。こうした文化的な側面も種差海岸の魅力の一つである。

この景観を守るため、以前から市民ボランティアによる清掃活動や外来種駆除等が積極的に行われており、当市も地域住民との協働による風致景観の保全や、遊歩道等の計画的な整備や維持管理を行い、観光客等の利便向上と安全確保を図ってきた。

また、国立公園指定を機に、種差海岸インフォメーションセンターに休憩施設を併設したほか、三陸復興国立公園の北の玄関口としてふさわしい空間を創出することを目的として、被災した蕪島地区に物産販売施設やプロム

ナード公園等を整備し、観光客の受入体制の充実に努めてきた。

現在は、国の支援を受けて、八戸圏域版DMOであるVISITはちのへの官民連携により、種差海岸内の観光施設の改修や宿泊施設の高付加価値化に取り組むこととしている。

国立公園指定から10年が経過し、国内外からの観光客が増えて知名度が向上したが、種差海岸を取り巻く社会情勢も変化し、新型コロナウイルス感染拡大による地元経済への影響のほか、経営者の高齢化や後継者不足により、観光事業者の廃業や保全団体の解散・活動縮小が課題となっており、若い世代等の新たな主体が観光事業や保全活動へ参画しやすい仕組みづくりが必要と考えている。

世界水準のナショナルパークを目指して策定した「三陸復興国立公園ステップアッププログラム」に基づく取組を着実かつ効果的に進めるほか、欧米人に人気の高いみちのく潮風トレイルの起終点である地の利を活かして、国内外への情報発信やインバウンド受入環境整備を更に推進し、自然の保護と利活用の調和に努めながら、持続可能な観光地づくりを通して、交流人口や関係人口の拡大、地域活性化を図りたい。

三陸の美しい景観や生物多様性を将来の世代に継承していくことが現代に生きる我々の責務であり、三陸復興国立公園を構成する3県18市町村の一員としてしっかりと取り組んでまいりたい。



中須賀

大船渡市長 淵上 清



地方における観光振興を担う 三陸復興国立公園について

三陸復興国立公園の指定から10周年を迎えたこと、誠に喜ばしく思う。

三陸復興国立公園は、東日本大震災から復興した地域の姿を伝える一方で、直線距離で約250kmに及ぶ広域な国立公園であり、変化に富んだ自然の景観美を楽しめるとも魅力的なコンテンツである。

当市における10年間の活動を振り返ると、三陸ジオパークと連携したイベントの開催など観光資源としての磨き上げを実施してきたほか、協議会の活動を通じて、観光PRブースの出展などによる情報発信を行ってきた。

また、最近では、旅行会社によるみちのく潮風トレイルを活用した企画イベントの開催や、ハイカーに対する地域住民の取り組みが認められ自然歩道関

係功労者表彰を受賞するなど、住民主体の自然公園を利用した地域振興策が広がりを見せている。

昨今流行しているマイクロツーリズムやアドベンチャーツーリズムは、自然やアクティビティ、異文化体験が要素として揃う三陸復興国立公園の追い風になると考えている。この10年間で、ボトムアップでの利活用が進み、知名度の向上及び社会的関心の高まりを感じているところであり、今後も利用者の更なる増加に向け、関係自治体などと協力しながら積極的に活動していく。

当市の概要について説明すると、人口約33,000人のまちで、岩手県の沿岸南部に位置し、水産業を中心に発展してきた。しかし、海の恵みを享受する一方で津波による被害を幾度も受けている。1960（昭和35）年に発生したチリ地震津波では、国内最大の被災地となり、2011（平成23）年に発生した東日本大震災では、死者・行方不明者数が419人にのぼった。

そこで震災後、防災施設の要として大船渡港湾口防波堤の建設や被災



首崎

市街地の土地区画整理事業、住宅の高台移転などを促す防災集団移転促進事業を実施することで、安心安全なまちづくりを進めてきた。被災した大船渡駅周辺は商業施設などが集積し、にぎわい拠点としての姿を取り戻している。

当市における自然公園の見所は、断崖の連続する特徴的かつ良好な海岸景観である。当市を代表する景勝地である碓石海岸は、国の名勝に指定されており、3つの洞門をもつ不思議な形をした穴通磯や、三陸ジオパークのなかで唯一「残したい日本の音風景100選（海部門）」に選ばれた雷岩などがあり、大自然が生んだ造形美を体感できる。また、植生も特徴的であり、海岸特有の植物と山野に自生する植物を同時に見ることができる。

さらに、ハイカーに人気のトレイルコースである綾里崎や、あまり知られていない秘境ともいえる首崎などもある。首崎の灯台から見える定置網のブイは、その光景が「地上絵ならぬ海上絵」と称賛され自慢の自然景観となっている。

また当市では、自然公園と産業を組み合わせた体験観光の創出に力を入れている。碓石海岸では、通年営業のキャンプ場が滞在拠点の1つとなっており、近隣店舗では、新鮮な魚介類の「とれたて捌き体験」や「わかめの芯抜き体験」を提供している。加えて、「恋し浜ホタテ」の生産地である三陸町綾里地域では、湾内を漁船で案内しながらホタテの養殖場見学や試食、海中貯蔵ワイン

の試飲ができる漁船クルーズを運航している。

このほか、行事・文化については、2018（平成30）年にユネスコ無形文化遺産に登録された吉浜のスネカや縄文時代の生活様式を伝える国指定史跡の貝塚などに誇れる地域資源がある。

さらに、災害多発地域として津波被害を風化させないことを目的に、三陸ジオパークのサイトである津波石に、津波の脅威を示す解説板を設置したほか、被災中心市街地では、津波避難体験をもとに防災について学ぶ「防災観光アドベンチャーゲーム」による教育旅行や視察対応プログラムの創出など復興ツーリズムの促進に向けた取組を進めている。

今後10年の展望としては、既存の観光資源と組み合わせたツアーの造成及び冬季における利活用を再検討することで、自然公園の更なる利用促進と観光客数の増加を目指していく。アフターコロナの観光需要への対応として、自然公園と地域行事や郷土芸能をはじめとした文化、海外人気の高いトレイルや穴通船などの組み合わせのほか、冬季においては全国的に有名な温泉施設など魅力的なコンテンツと組み合わせることによって、誘客力のある旅行商品の造成に努めていく。

指定10周年を機に、当市としても上記の取組などを通じて、三陸復興国立公園の更なる発展に尽力していきたい。



穴通磯



合足の津波石

石巻市長 齋藤 正美



三陸復興国立公園指定10周年に寄せて

三陸復興国立公園指定 10 周年を心よりお祝する。

また、東日本大震災以降本件に携わっている環境省、ならびに関係各位に対して、深い感謝と敬意を表する。

三陸復興国立公園の創設は、青森県八戸市から岩手県を経て宮城県石巻市までの沿岸地域における復興を加速させた。

石巻市は、北上川の下流域から牡鹿半島一帯に位置し、北上川に育まれた実り多い土壌や、世界三大漁場として知られる三陸・金華山沖などの自然から、多くの恩恵を享受し発展してきた都市であり、この豊かな自然を守り、次世代に継承していくことは、私たちの重大な責務であると考えている。



金華山

石巻市の紹介をさせていただくと、北上川の下流域に位置する石巻市北上地区は、「残したい日本の音風景 100 選」に選ばれた北上川河口のヨシ原など、自然と人の営みが相まって形成されてきた景観が豊かに残されている。

また、このエリアは、三陸復興国立公園を核とした「グリーン復興」の取り組みとして、環境省により石巻市北上地区に設置していただいた「石巻・川のビジターセンター」を拠点とし、自然体験活動を通して、エコツーリズムや環境教育を面的・複合的に推進するフィールドミュージアム事業を推進している。当センターは、森・里・川・海のつながりを感じられる自然体験プログラムのほか、自然体験活動指導者の育成なども行われており、子どもから大人まで多くの人が自然への興味を深め、自然

の素晴らしさや偉大さを知ることができる環境教育の場として、活用させていただいている。

次に、世界三大漁場として知られる三陸・金華山沖を間近に見ることができる石巻市牡鹿地区は、「かおり風景 100 選」として「金華山の原生林と鹿」が選出されており、自然や生活、文化に根ざした香りのある地域が残されている。また、牡鹿半島エリアには、三陸復興国立公園の南端と

なる金華山・網地島・田代島を含む自然の恵みや自然とともに生きる人々の暮らしについて紹介する拠点施設として「牡鹿半島ビジターセンター」も環境省に開設していただいた。当センターは、牡鹿半島に生息する海・川・陸の生き物の展示を行っているほか、施設周辺の海や森で生き物観察会を実施し、身近な自然から生き物同士のつながりを学ぶことができる施設となっており、また、観光拠点施設「ホエールタウンおしか」の一連施設として、地域活性化の起点となっている。

また、「東日本大震災からの復興」を契機とし、環境省を中心に、関係自治体、民間団体、地域住民の協働により創設された「みちのく潮風トレイル」は、本市の美しい自然や景観はもとより、石巻市の地域に暮らす人々と訪れる人々との交流、自然の恵みと震災の記憶、自然との共生の中で育まれた暮らしや歴史・文化を大切にすることを理念とし、官民の連携により維持され、環境教育や震災伝承のための教育資源



夕焼けに輝くヨシ原

として、また豊かな自然と触れ合う観光資源として広く活用されており、国内の利用者に留まらず、国外からの旅行者にも好評を得ている。

これらの、国立公園や環境教育拠点施設等は、利用者に対し、非日常的な自然体験を、五感で感じていただくために整備されたものであり、一人でも多くの方に自然を通して得られる感動を味わっていただけるよう、本市としても引き続き、施設の周知や情報の発信に取り組み、利活用の促進を図るとともに、自然環境の保全を行い、自然の恵み溢れる魅力的な地域づくりを進めていきたい。

結びになるが、あらためて、三陸復興国立公園指定 10 周年を迎え、これまで御尽力いただいた、環境省をはじめとする国、県、その他関係者の皆様に心より感謝を申し上げるとともに、当公園による自然環境の保全、及び自然環境と調和した持続可能な地域の発展を祈念して、メッセージとさせていただきます。



ヨシ原

三陸復興国立公園フォトスナップ



小舟渡(八戸市)



御箱崎千疊敷から三貫島を望む(釜石市)



志津川湾(南三陸町)

子どもたちからのメッセージ

広田小学校とみちのく潮風トレイルについて

大船渡自然保護官事務所

陸前高田市立広田小学校と三陸復興国立公園・みちのく潮風トレイルとの関わりは、元々、広田小学校が岩手県立大学総合政策学部島田直明教授と協働で実施してきた6年生の総合的な学習の時間に行われる自分達の「地域」を知るための授業にはじまっている。広田小学校がある広田半島は三陸復興国立公園の一部に位置していること、広田半島を1周する形でみちのく潮風トレイルのルートが通っていることから、2018年から大船渡自然保護官事務所も授業に参画し、子どもたちに自分達が住んでいる地域が、誇るべき、守るべき環境・資源であると気づいてもらうため、国立公園やみちのく潮風トレイルに関する講義を行ってきた。

2018年度からの最初の2年間は、広田小学校近隣の三陸復興国立公園について知り、地域の自然の素晴らしさに気づいてもらうこと、その国立公園や自然を楽しむツールとしてみちのく潮風トレイルについて学習してもらうべく、ハイキング体験を行った。3年目となる2020年度には、子どもたちが自分達で広田半島のおすすめスポットを調べて地図にするという地域資源地図の制作授業を行い、岩手県立大学で受けた北いわて・三陸地域活性化推進費の補助金も印刷費に活用し、『みちのく潮風トレイル 陸前高田市広田半島ルート／2020年度広田小学校6年生版』という一般の方にも配付できる地図を制作した。そして、この地図は、実際に地



元の陸前高田市観光物産協会や関係機関に配布された。翌年の2021年度からは、授業のプログラムを継続可能で地域に根付いたものにするため、陸前高田市観光物産協会に授業への参画をお願いし、講義をしてもらうことに加え、地図の印刷費への協力を得て、現在まで毎年バージョンアップされた地図が制作され、地元観光協会や名取トレイルセンター等で配付を行っている。

この地図を手にしたハイカーや観光客からの評判はとても良く、反響が学校や子どもたちにも届くことから、達成感が後からも感じられているようである。また、みちのく潮風トレイルの認知度が子どもたちのご家族や近所の住民の間でも上がり、地域の盛り上げにも一役買っているところも嬉しい成果である。

この授業を受けた子どもたちからは、「この授業がとても楽しかった」、「知らなかった広田が知れた」、「より一層広田が好きになった」と、地域を知る総合的な授業の成果も上がっており、今後もこの授業の取組は関係機関と協働で継続していく予定である。

広田小学校の子どもたちのことば

2023年度、実際に三陸復興国立公園やみちのく潮風トレイルに関する授業を受けてくれた広田小学校6年生16名のメッセージをご紹介します。

自分はまだ知らないことがたくさんあって、びっくりしたけど楽しかったです。
愛桜

広田には、あてきな場所がたくさんあることを知って、うれしかったです。
優菜

潮風トレイルを歩いて、食べられる実を食べて、とてもおいしかったです。また歩きたいです。
玖貴

黒崎仙峡の展望台から見た海の景色がとてもきれいで、また見に行きたいです。
岳海

自分かいていくことになって広田の自然を守りたいと思いました。
伸弓

広田の海は改めてとてもきれいだと思います。
一華

黒崎展望台に行くまでの山の中の道を歩いたとき、見たことのない植物がたくさんあって、楽しかったです。
陽葵

潮風トレイルも歩いてみて、初めて見る植物がたくさんあって楽しかったです。
仁心

自然にふれあう機会が最近なかったけど、自然とふれあう事ができてうれしかったです。
斗斗

森に入った時、すずしくて気持ちよかったし、植物もたくさんあって楽しかったです。
優心

潮風トレイルの道を歩いているとすずしい木かげがあって気持ち良かったです。
修羅

木かげに入ると、すずしい風が気持ち良かったです。
心女

林の中を歩くのがとても楽しかったです。またいつか歩きたいです。
大輝

みちのく潮風トレイルも歩くことができて楽しかったです。
琉唯

潮風トレイルを歩くことができたので楽しかったです。また行きたいです。
凌寛

参考資料

参考資料については、以下から確認・ダウンロードが可能です（2023年12月20日時点情報）。

■三陸復興国立公園 公園計画図

- その1（種差海岸階上岳地域）<https://www.env.go.jp/park/sanriku/intro/files/sono1.pdf>
（縮尺：1/25,000）
- その2（陸中北部）<https://www.env.go.jp/park/sanriku/intro/files/sono2.pdf>
（縮尺：1/50,000）
- その2-1（山田湾）https://www.env.go.jp/park/sanriku/intro/files/sono2_1.pdf
（縮尺：1/25,000）
- その3（陸中南部）<https://www.env.go.jp/park/sanriku/intro/files/sono3.pdf>
（縮尺：1/50,000）
- その4（南三陸金華山地域）<https://www.env.go.jp/park/sanriku/intro/files/sono4.pdf>
- その5（南三陸金華山地域）<https://www.env.go.jp/park/sanriku/intro/files/sono5.pdf>
- その5-1（志津川湾）https://www.env.go.jp/park/sanriku/intro/files/sono5_1.pdf
（縮尺：1/25,000）
- その6（南三陸金華山地域）
- その7（祝浜）https://www.env.go.jp/park/sanriku/intro/files/sono7_1.pdf
（縮尺：1/25,000）

■三陸復興国立公園 管理計画

- 種差海岸階上岳地域 管理運営計画書（2016年3月）
<https://www.env.go.jp/park/sanriku/intro/files/160617a.pdf>
- 陸中海岸北部地域・南部地域 管理計画書（2003年3月）
<https://www.env.go.jp/park/sanriku/intro/files/140514a.pdf>

- 三陸復興国立公園 ステップアッププログラム 2025（2023年12月）
<https://tohoku.env.go.jp/content/000189068.pdf>



三陸復興国立公園
指定書・公園計画書(2015年3月)
<https://www.env.go.jp/park/sanriku/intro/files/151007b.pdf>



三陸復興国立公園
指定植物一覧(2015年5月)
<https://www.env.go.jp/content/900492767.pdf>

施設案内

種差海岸インフォメーションセンター



青森県八戸市大字鯨町字棚久保 14-167
☎ 0178-51-8500
<http://tanesashi.info/>

北山崎ビジターセンター



岩手県田野畑村北山 129-1
☎ 0194-33-3248
<https://www.vill.tanohata.iwate.jp/kankou/sec/visitor-center.html>

浄土ヶ浜ビジターセンター



岩手県宮古市日立浜町 32-69
☎ 0193-65-1690
<http://jodogahama-vc.jp/>

震災メモリアルパーク中の浜※



岩手県宮古市崎山第3地割 123
※無人施設

碓氷海岸インフォメーションセンター



岩手県大船渡市末崎町字大浜 22-1-68
☎ 0192-29-2359
<https://goishi.info/>

唐桑半島ビジターセンター※



宮城県気仙沼市唐桑町崎浜 4-3
☎ 0226-32-3029
※令和5年12月現在、施設リニューアルのため、休館中。令和6年度春リニューアルオープン予定

南三陸・海のビジターセンター



宮城県本吉郡南三陸町戸倉字坂本 21-1
☎ 0226-25-7622
<http://tanesashi.info/>

石巻・川のビジターセンター



宮城県石巻市北上町十三浜字東田 1
☎ 0225-24-6506
<http://kawatouminovisitorcenter.jp/kawa/>

牡鹿半島ビジターセンター



宮城県石巻市鮎川浜南 50-1
☎ 0225-24-6912
<https://oshika-vc.jp/>

名取トレイルセンター（公園外）



宮城県名取市関東 3-12-1
☎ 022-398-6181
<https://www.mct-natori-tc.jp/>

三陸復興国立公園フォトスナップ



種差海岸(八戸市)



碓石海岸キャンプ場(大船渡市)



網地島(石巻市)

結びに

10 周年に寄せて

環境省東北地方環境事務所長
田村 省二



10 年目を迎えた三陸復興国立公園の現地管理の立場から一言。私が環境庁に入った 1991 年を振り返ると、全国に自然系職員（レンジャー）は 110 数名しかおらず、三陸復興国立公園の前身の陸中海岸国立公園には、宮古と碓石海岸に一人ずついるだけだった。1964 年 4 月に宮古に赴任した職員の記録を見ると、宮古市役所の観光課長と農林課長の間で執務していたとあり、黎明期には独自の事務所すらなかったことが分かる。東日本大震災後、公園区域の拡張とともに、八戸と石巻の 2 箇所に新たに事務所が設けられ、現地管理の充実が図られた。平成初期と比較すると、全国のレンジャー数は 3 倍に増えた。2024 年春の組織改編で、宮古自然保護官事務所は三陸復興国立公園管理事務所にかわり、公園管理体制の強化が図られる。公園管理体制は、私が入庁した頃からずっと発展途上と言われ続けており、今後も社会のニーズにあわせ、成長することが期待される。

個人的な話になるが、2022 年 7 月の東北地方環境事務所への着任早々、みちのく潮風トレイルを歩き始めた。約 9 か月で全線約 1,025km を歩ききり、南北に長い本公園の魅力と、そこに刻まれている震災の傷跡に、心を痛めたりもした。

自然は動的なもので、我々に豊かさを与える半面、時として、人を傷つけ、命を奪う。震災から 13 年目が近づき、小学校高学年以下の子供にとって、生まれる前の出来事なので、知る由もない。子供たちに震災の記憶を伝えることが大切なのは勿論であるが、人は忘れやすい生き物なので、記憶し続けることが大きな課題である。

今回、多くの関係者にご寄稿頂き、三陸復興国立公園 10 周年記念誌をとりまとめることができた。日々、本公園の管理・運営にご理解とご協力頂いていることに感謝するとともに、未永く愛され続けることを願う。本公園の名称の「復興」が完了することを目指したい。